博多 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集

1981

福岡市教育委員会

博多 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集

7920
8024

1981
福岡市教育委員会

序　　文

旧博多部は本市が新たな交通体系として導入した地下鉄建設に伴ない市街地の再開発による新たな発展を遂げようとしています。

この地域は古くから活発な大陸との交易、禅など新しい文化の上陸地点としての役割をにない「中世の都市」の中でも特に注目されている地域ですが、この開発に伴って、貴重な文化財が次々と消滅していくという情況が生れて来ましたので、昭和54年度より「博多遺跡群」として同地区の調査を国庫補助事業の一つとして取組むことにいたしました。本報告書はその第1分冊にあたるものです。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、更には学術研究上役立つことが出来れば幸です。

調査に際しましては、多くの方々のご理解とご協力をいただきましたことに深甚の敬意を表すものであります。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

本 文 目 次

本文対照頁

第Ⅰ章　はじめに……1

第Ⅱ章　博多－A（博多区冷泉町474の９地内の調査）

1．調査に至る経過……3

2．調査の概要……4

3．検出遺構……7

4．出土遺物……9

5．まとめ……30

第Ⅲ章　博多－B－第１部図版編（博多区冷泉町７の１地内の調査）……31

挿 図 目 次

Fig. 1　博多地形図と調査地点……2

Fig. 2　遺跡位置図（博多－A・博多区冷泉町474の９地内の調査）……3

Fig. 3　調査区設定図……4

Fig. 4　土層断面実測図……5

Fig. 5　遺構全体図……6

Fig. 6　６号土壙出土滑石製人形……7

Fig. 7　６号土壙実測図……8

Fig. 8　８号土壙実測図……8

Fig. 9　出土遺物(1)……10

Fig.10　出土遺物(2)……11

Fig.11　出土遺物(3)……13

Fig.12　出土遺物(4)……14

Fig.13　出土遺物(5)……16

Fig.14　出土遺物(6)……17

Fig.15　出土遺物(7)……19

Fig.16　出土遺物(8)……20

Fig.17　出土遺物(9)……22

Fig.18　出土遺物(10)……24

Fig.19　出土遺物(11)……25

Fig.20　出土遺物(12)……27

Fig.21　出土遺物13)……28
Fig.22　出土遺物14)……29
Fig.23　博多－B（冷泉町７－１）地形図……31

図　版　目　次

巻頭Ⅰ．博多の街遠望（航空写真）
巻頭Ⅱ．博多－B（冷泉町７－１）出土遺物－カラー
巻頭Ⅲ．博多－B（冷泉町７－１）出土遺物－カラー
巻頭Ⅳ．博多－B（冷泉町７－１）出土遺物－カラー
PL.1　１．調査区近景　２．調査風景
PL.2　１．遺構全景　２．遺構全景
PL.3　１．D－６全景　２．D－６滑石製人形出土状態　３．D－６滑石製人形出土状態
　　４．D－８全景　５．D－８全景
PL.4　１．D－13全景　２．M－１全景　３．井戸２　４．D－５掘方壁の鍬あと
　　５．南側土層断面
PL.5　出土遺物1)
PL.6　出土遺物2)
PL.7　出土遺物3)
PL.8　出土遺物4)
PL.9　出土遺物5)
PL.10　出土遺物6)
PL.11　出土遺物7)
PL.12　出土遺物8)
PL.13　出土遺物9)
PL.14　出土遺物10
PL.15　１．博多－B地遠景（航空写真）　２．作業風景
PL.16　１．B－３、C－３区遠景（南より）　２．B－３、C－３区遠景（東より）
PL.17　１．冷泉町７－１遠景（東南より）　２．A－２、B－２区遠景（南より）
PL.18　１．A－１、B－１区遠景（東より）　２．D－１、D－４区遠景（南より）
PL.19　１．C－２区遠景（東より）　２．E－２区（地下鉄・換気塔）遠景（西より）
PL.20　１．１号溝（M－１）出土状態（南より）２．１号溝（M－１）出土状態（南より）
PL.21　１．井戸（D－１）出土状態（東より）２．井戸（D－１）枠出土状態（南より）
PL.22　３号溝出土状態（方向、現在の街並平行）

例　　言

1．本書は、博多地区再開発ビル建設に伴い、福岡市教育委員会が国庫の補助を受けて、実施した中世の「博多」緊急発掘調査の報告書である。

2．本書は、「博多」－Ⅰとし、逐次博多地区の発掘報告書が刊行されていくが、次回から刊行される報告書は、「博多」－Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ……となるものとする。

3．博多地区は大きくみて博多そのものを一つの遺跡として把握し、調査される場所は地点としてとらえたい。故に、報告される遺跡は頭番号として、博多A・B・C……の符号が付される。

4．今回報告される調査地点と地番は以下のとおりである。

博多－A地点……博多区冷泉町474－9

博多－B地点……博多区冷泉町7－1

5．博多－A地点の報告は今回の内容を以って完結する。しかし、博多－B地点は時間的制約から、第1部図版編として刊行し、第2部本文編は次の機会に委ねることとし、今回は、博多－B－(1)図版編として御理解されたい。

6．博多－A地点に関係する挿図と図版は以下のとおりである。

Fig. 2～Fig. 22の挿図。PL. 1～PL. 14の図版。

博多－B地点に関係する挿図と図版は以下のとおりである。

Fig. 23の挿図。巻頭図版（カラー）Ⅱ・Ⅲ・ⅣとPL. 15～PL. 22の図版。

7．本書の地形図（Fig. 1・2・23）は、国土地理院発行の2万5千分の1の地図「福岡」の1部と福岡市都市計画地図2千5百分の1の一部を使用している。

8．出土遺物・各種実測図面・記録写真は福岡市教育委員会文化部文化課に保管されている。

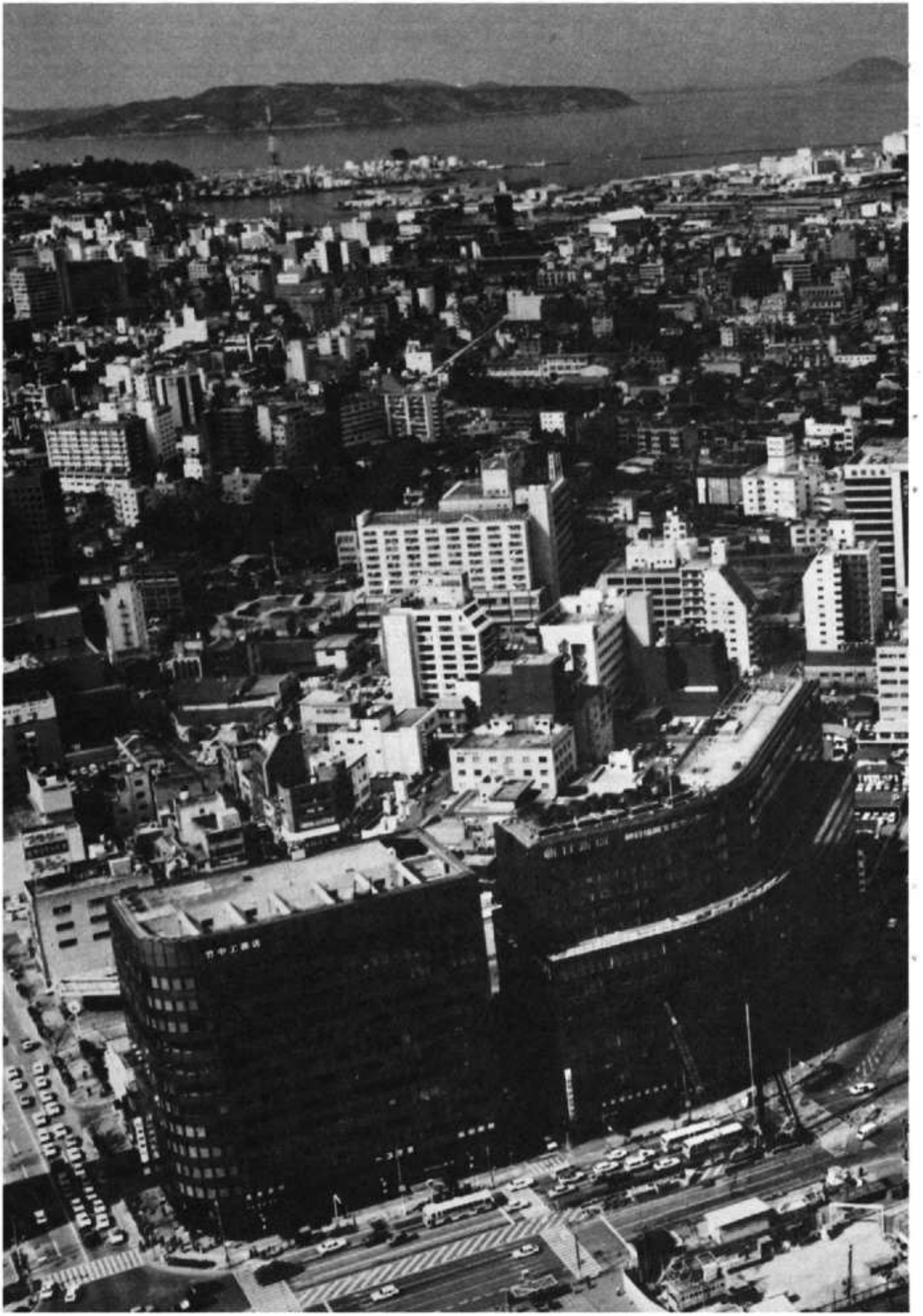
9．巻頭のカラー写真は財政逼迫の折、贅沢と考えたが、今後、博多の輸入陶磁器研究の上で各種遺物の生地と色調を読者に示し、御教示を得ん為、掲載に踏み切ったものである。

10．各遺構・遺物の実測・製図は森本朝子・日野光嗣・日野孝司・信行千尋・田中克子・常松幹雄の尽力によるところ大である。

11．写真撮影・現像・焼付は白石公高が行った（カラー現像・焼付は除く）。

12．本書の編集は、池崎譲二・折尾　学が行った。執筆は第Ⅱ章を池崎が、第Ⅰ・Ⅲ章を折尾が行った。

13．題字「博多」は筑紫豊先生の筆によるものである。



巻頭1　博多駅より博多の街をのぞむ
（右、志賀島　左、能古島　中央、玄界島）

巻頭Ⅱ　上ー 黄釉褐彩盤

中ー左.低火度釉の陶器と黄釉褐彩の陶器(右上)。同じ灰褐色の胎土である。

ー右.天目茶碗各種

下ー左.白磁鉄絵鉢と青磁劃花瓶及び印花碗

ー右.朝鮮の青磁類

巻頭Ⅲ　上一左．龍泉窯系碗皿Ⅰ　右．同安窯系碗皿
中一左．龍泉窯系碗皿Ⅱ　右．白磁碗Ⅰ
中一左．白磁皿Ⅰ　右．白磁碗Ⅱ
下一左．白磁皿Ⅱ　右．白磁壺各種

巻頭Ⅳ　上一左．陶器甕、壺類　　右．陶器碗皿
中一左．陶器大形壺甕類　　右．陶器鉢類、捏鉢、摺鉢など
中一左．緑釉陶器　　右．青白磁各種、褐釉合子
下一左．黒褐釉壺と褐釉四耳壺　　右．青白磁碗

第Ⅰ章　はじめに

「博多」という地名の初見は、『続日本紀』天平宝字3年(759)3月24日条にみえる「博多津大津」である。博多の歴史は「大宰博多津」として、まず大宰府の外交的役割から開始される。この頃の博多は、現在でいう博多湾を示しているもので、現在の博多が、対外貿易の拠点として役割を開始するのは、日宋貿易の展開期だとされている。そして、博多の街を、九州の政治・軍事・経済・文化の中心的存在に据えたのが、鎌倉後半期の蒙古襲来であった。この頃、九州の政治の中心が大宰府から博多へ移ったのである。それ以後、日朝・日明貿易の博多商人の活躍はめざましく、博多の黄金時代を築き、又権力者の争奪の対象ともなり、商人と政治権力の複雑な関係が、歴史上に展開されていくのである。

現在進められている「博多」の街の埋蔵文化財の調査が如何程に「博多」の歴史的ダイナミズムに接近していけるのか、行政的課題は余りにも大きいと言わねばならない。地下鉄工事に先行して進められた「博多」の街の調査も早や4年目を迎える（2頁の表、Fig・1）が、ここにその成果の一端を示し、第Ⅱ・第Ⅲの報告を行っていきながら、先学の御教示を給わりたいと念じる次第である。なお、歴史上重要な「博多」の街は、西の那珂川と博多川、東の石堂川、北の長浜通り、南の住吉（神社）通りに狭まれた地域を考えている。

調　査　体　制

福岡市教育委員会	教　育　長	西　津　茂　美
	文化部長	志　鶴　幸　弘
	文化課長	井　上　剛　紀
	埋蔵文化財第1係長	三　宅　安　吉
	埋蔵文化財第2係長	柳　田　純　孝
	（庶務担当）	古　藤　国　生
	（調査担当）	濱石哲也・山崎龍雄
		池崎譲二・折尾　学
調査補助員―考古学	森本朝子・日野孝司・信行千尋・田中克子・常松幹雄	
	山崎賀代子（旧姓小川）・井上加代子（旧姓瀬戸）	
写真撮影	白石公高	
整理補助員	能美須賀子・西原年枝・伊藤裕子・中園佳公恵・木村厚子	
	今村淳子・野口政伸・伊藤麗子・高木正子	
	川尻真知枝・三芳尚子・栗原由美子・崎村芳子・岡部直美	
	土生裕子・口野光嗣	

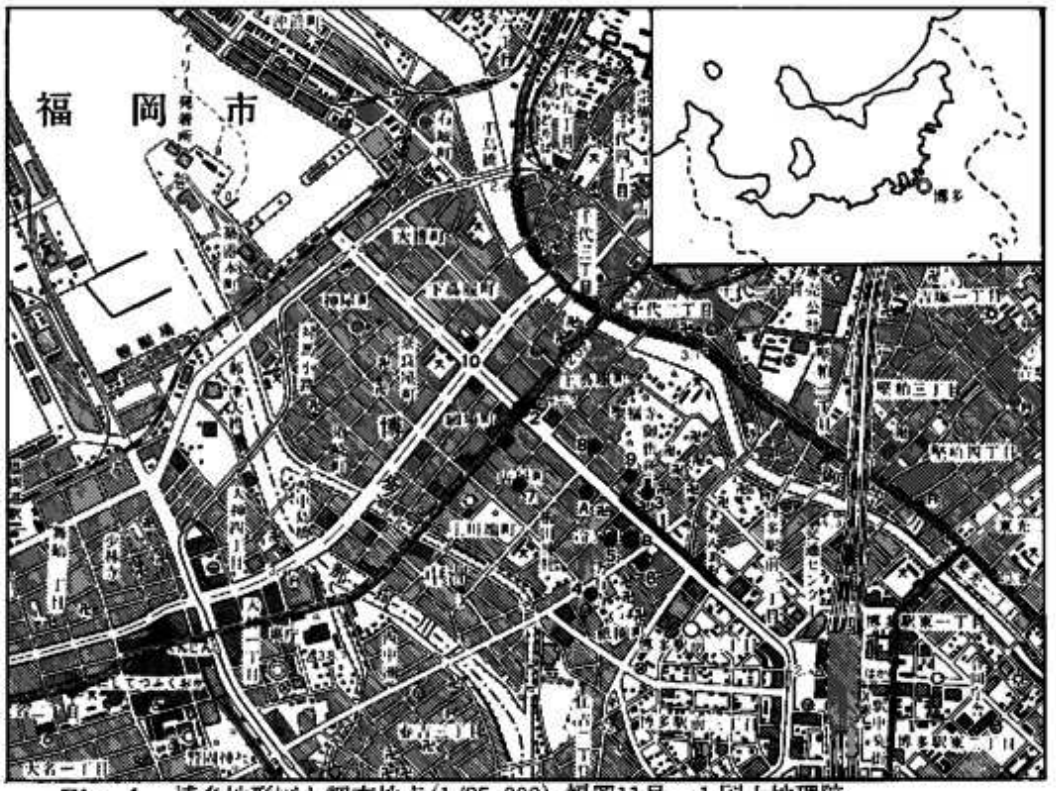


Fig. 1　博多地形図と調査地点(1/25,000) 福岡11号－1 国土地理院

番号	所在地（博多区）	調査年月（昭和）	調査面積	備　　考
A	冷泉町474－9	55年12月	54㎡	今回報告
B	冷泉町7－1	54年12月～55年3月	1,100㎡	今回報告
1	地下鉄路線内 (1) 店屋町工区	52年11月～53年10月	1,500㎡	
	地下鉄路線内 (2) 祇園町工区	54年5月～　11月	4,200㎡	
2	地下鉄路線内 呉服町工区	53年11月～54年5月	345㎡	柚ノ薄跡、トレンチ調査 55年2月現在駅舎出入口調査中
3	御供所町 東長寺境内(1)	53年11月～54年1月	360㎡	納骨堂建設
	御供所町 東長寺境内(2)	55年8月～10月	600㎡	本堂建設
4	祇園町 万行寺境内	54年11月～12月	240㎡	納骨堂建設
5	冷泉町155	55年3月～4月	640㎡	マンション建設
6	祇園町130	55年6月～8月	210㎡	マンション建設
7	店屋町99	54年4月	約　100㎡	立会調査、土層図作成
8	上呉服町75	55年10月		試掘、狭少のため本調査不可
9	御供所町215	55年12月		試掘、狭少のため本調査不可
10	下呉服町346	55年1月		試掘、砂層から礎石

第Ⅱ章　博多A地点・冷泉町474—9地内の調査

1．調　査　に　到　る　経　過

旧博多部一帯では近年、地下鉄工事をはじめ、マンション・納骨堂建設等の再開発に伴ない事前に発掘調査を行なって来た。その結果、中世都市博多の諸様相を良好にとどめる遺構包含層の遺存していることが周知されている。1980年8月、福岡市教育委員会は、博多区冷泉474—9の駐車場地に9階建てのビル建設計画があることを建設業者から知らされ、当該地における埋蔵文化財の有無を確認することになった、

試掘調査は同年9月25日に行ない、地表下約2mまでは近・現代の攪乱層であり、その下位に中国陶磁等を含む鎌倉～室町期の包含層、焼土等の遺構を確認した。また遺構最下面までの深さは4～5m程と予想した。

福岡市教育委員会では同年11月、この結果をもとに建主の塚喜商事㈱、建築業者鴻池組㈱と協議し今調査への協力を依頼したところ了解を得られたので、ここに発掘調査を行なうこととなった。

発掘調査は池崎譲二が担当した。

調査にあたって、文化財調査への御理解と御協力を頂いた塚喜商事㈱・塚本喜左エ門社長

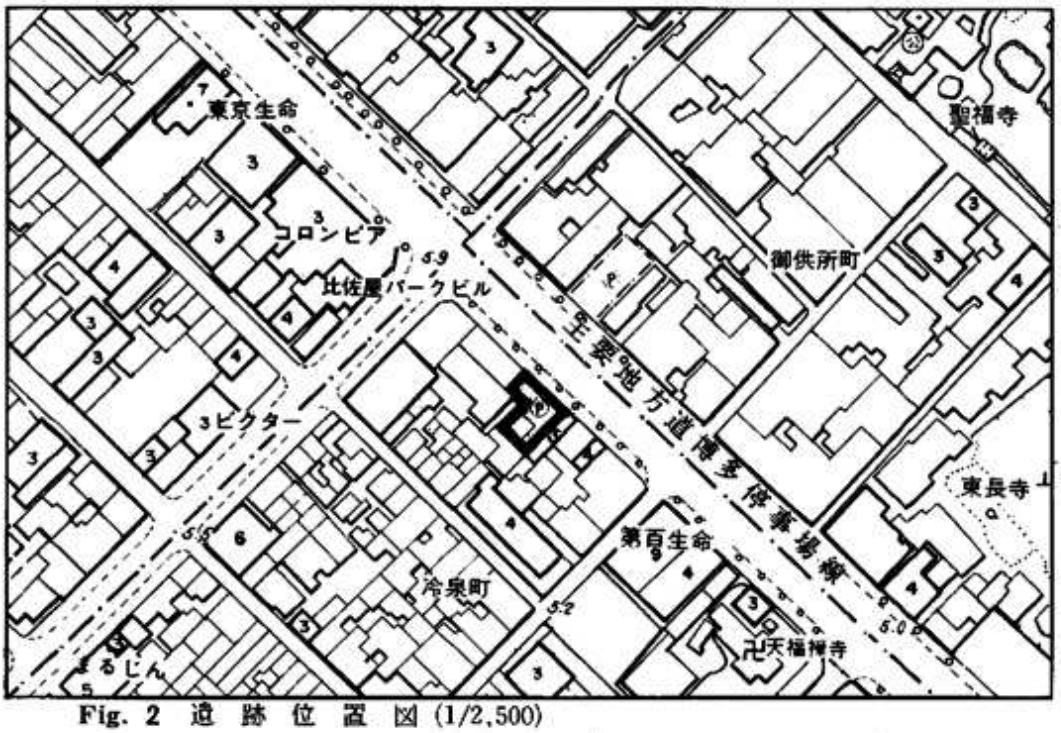


Fig. 2　遺　跡　位　置　図 (1/2,500)

・鴻池組㈱の皆様に、心から謝意を表する次第である。

また、みぞれの降る中で頑張って頂いた作業員の方々にも心から感謝したい。

調査補助員　日野孝司・白石公高

調査協力者　緒方　寿・日野光嗣・島　恭一・荻田重美・赤司善彦・山中章二
大橋隆司・安部国恵・安部サエ子・大歯みつ子・黒木アサノ・柴田スマ子
三島タミ子・永田恭子

2．調　査　の　概　要

調査地冷泉474－9は、旧地名では太閤町割による目貫通り一縦町筋の一つ、呉服町流小山町上に属する。この縦町筋は巨富を得た博多商人の居住地であったとされているところである。また小山町付近は標高6m程度で、その名が示すとおり周辺より1～2m小高くなっている。

調査は駐車場跡地でL字形をなす約360㎡が対象である。地表下2mが撹乱層、遺構最下面まで4～5mという試掘の結果と、基盤が砂層であり、隣地にビル・ブロック塀があること等安全対策上の問題と、排土の問題から全面調査は不可能で、9×6m・54㎡の小範囲の調査にとどまらざるを得なかった。また、基礎杭打ちを先行し撹乱層を機械で除去した後調査にはいる予定であったが、工事工程上、鉄柱据付、一段梁桁まで終了した段階で調査となった。

調査は12月2日に開始し12日をもって完了した。予想以上に撹乱がひどく、良好な遺構は少なかったが、確認した遺構は、便宜上近・現代の撹乱土壙をも含め、それぞれ土壙＝D、溝＝M、ピット＝Pの略号を用い、調査順に番号をつけた。これらの遺構は撹乱層除去直後に確認したものを上部遺構、以後のものを下部遺構とし、それぞれの平面図を付している。遺構については別項で説明する。

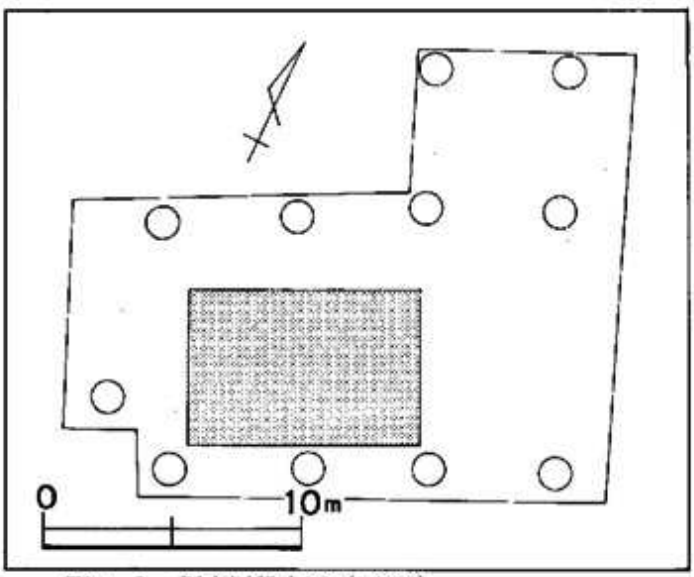


Fig. 3　調査区設定図（1/300）

周辺の発掘調査での基本的層位は、Ⅰ表土撹乱層、Ⅱ黒褐色粘質土・砂質土層、Ⅲ茶褐色砂層、Ⅳ黄白色砂層（基盤）であり、それぞれ近世以降、鎌倉～室町、弥生～平安、弥生甕棺の各時代遺物を包含していることがわかっている。

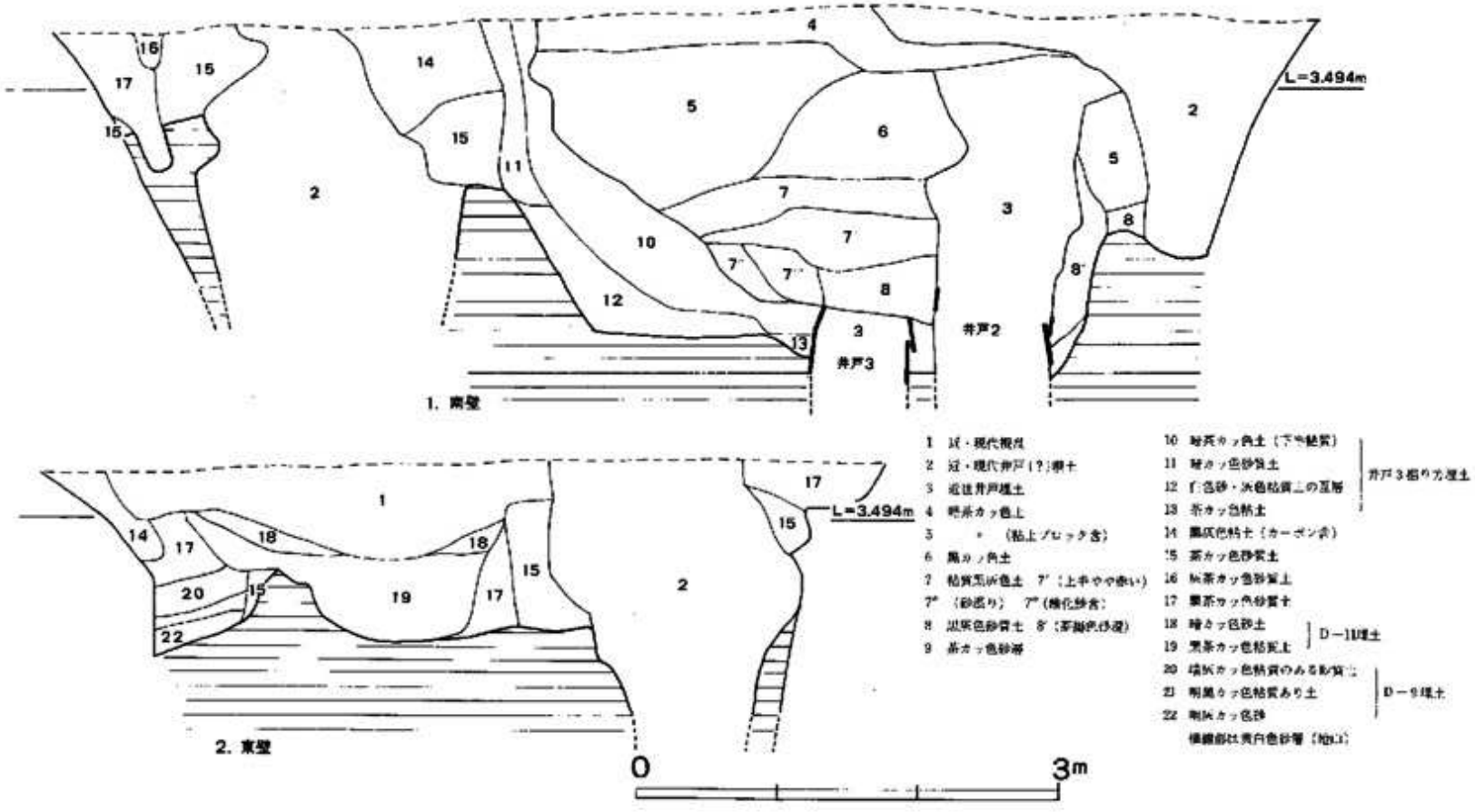
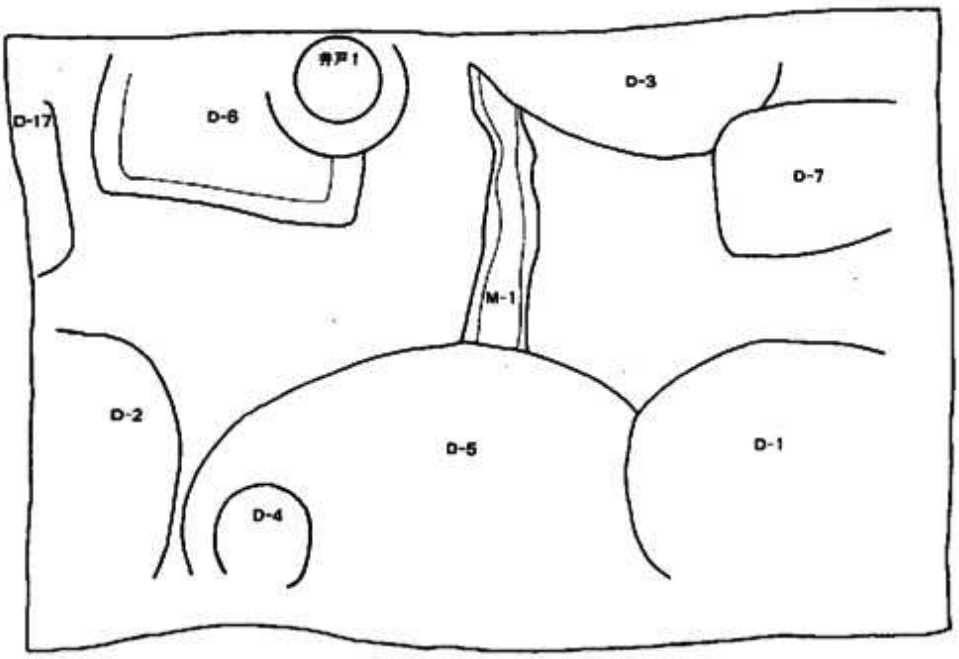
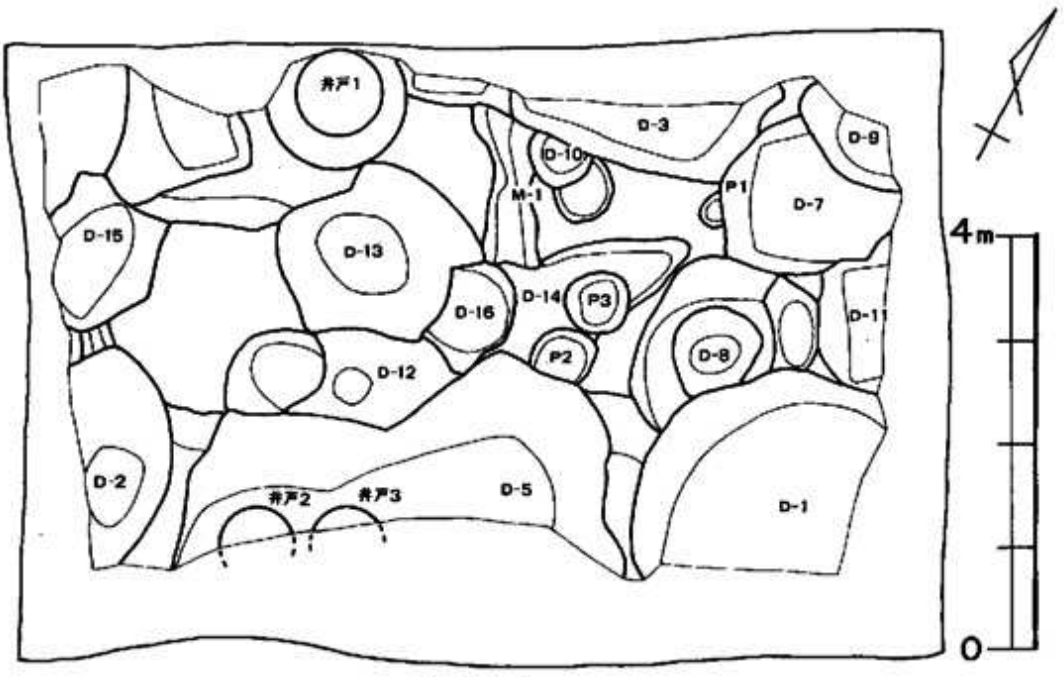


Fig. 4 土層断面実測図



1．上部遺構



2．下部遺構

Fig. 5 遺 構 全 体 図 (1/75)

しかし、当地においては後世の攪乱をはげしく受け、包含層はFig. 4. 土層図に見られるようにⅡ＝14・17層、Ⅲ＝15層とわずかに残されるのみである。

3．検　出　遺　構

今回の調査では、土壙－17、井戸－3（一部土壙と重複）、溝－1、ピット－3を検出している。このうち土壙については、近・現代の攪乱も便宜上含んでいる。ここでは、それらの遺構について概略を説明する。

D－1　近代の井戸と考えられるが、大石が埋められていたため、それより下は掘り下げられず詳細は不明である。遺物は量的には多いが、ガラ混じりの埋土中に土師器から近代陶磁器まで各時期混然として存在する。

D－2　D－1同様近代の井戸掘方と考えられるが、その大半は調査区外にかかり詳細は不明である。

D－3　D－1・2に比べ遺構最下面までが浅い。近世の攪乱土壙である。D－7に切られる。出土遺物に混じりがある。

D－4　ほぼ江戸時代と考えられる井戸（井戸2）の本体である。土層図に見られるように、下位に瓦組みの井戸側が残されている。遺物は混じりが多い。井戸3より新しい。

D－5　井戸2・3(江戸時代)の掘方である。調査中には両掘方の区別がつかず、一括して掘っていたが土層の観察によって井戸3廃棄後に井戸2を構築していることがわかった。また壁の砂層には井戸掘削時の鍬あとが明瞭に残されていた。遺物は大量に出土しているが、混じりがある。鎌倉～室町期の中国陶磁も多く含まれている。

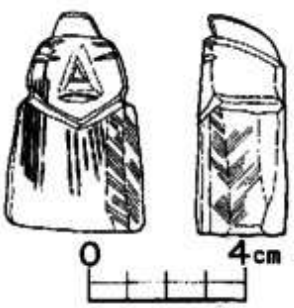


Fig. 6　6号土壙出土滑石製人形

D－6(Fig.7)北辺を井戸1に切られ、一部が調査区外に伸びており全容はつかめないが、長軸2.5mの、おそらく長方形をなすと思われる深さ0.8mの土壙である。床面直上には魚骨を含む骨片が堆積していたが、遺存状態は不良であり、埋土と識別しうるのみであった。また南辺中央に板石が置かれ、その上面と西辺床面上に、銅銭状の銅片があったが、いずれも小破片で腐触がはげしい。また、床面よりやや浮いた状態で滑石製人形 (Fig.6) が出土した。分銅形で、刻線で顔と胴部を区別しており、頭部には烏帽子を削り出す。顔は目・鼻・口を鋭く削って表現し肩は2本の細線で表わしている。覆土からは少量の遺物が出土しているが、混じりはあるものの下限はおさえられ、16C末～17Cと推定できる。墓であろうか。

D－7　現代攪乱である。

D－8 (Fig.8) 直径2m程の円形をなす2段掘りの土壙で砂層に掘り込まれている。東を

D－1に切られる。

一段目の床面のレベルに、石・骨片・土師器・陶磁器等が集中する。遺物にはいくらかの時間的幅はみられるものの、14-5Cにおさまるようである。井戸か。

D－9　大半は調査区外にかかり全容はわからない。覆土には炭化物、灰層の水平堆積が見られる。遺物には若干の混じりがあるが、いずれも小破片である。青磁片1点に対し白磁片40点という比率である。白磁には12C頃の様相を見せるものが多いが、総体としては12～13Cにおさまるものであろう。骨片・鉄釘等もあり墓の可能性がある。

D－10　D－3に切られ、M－1を切る。深さ0.2mの浅い皿状の掘方である。少量の土師皿片が出土している。

D－11　東側が調査区外にかわり全容は不明である。遺構上面にD－7の攪乱を受け、またD－9より新しい。覆土は上半が暗茶褐色砂質土で、下半が遺物を多く含むカーボン混じりの黒茶褐色粘質土である。攪乱の影響で近代遺物

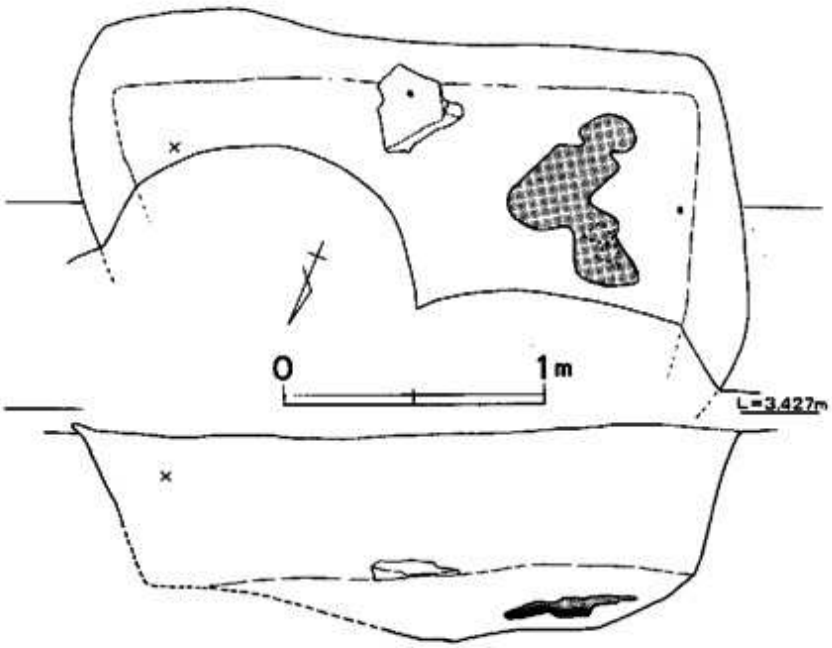


Fig. 7　6号土壙実測図（1/30）×　滑石製人形出土地点
網部分　骨片範囲

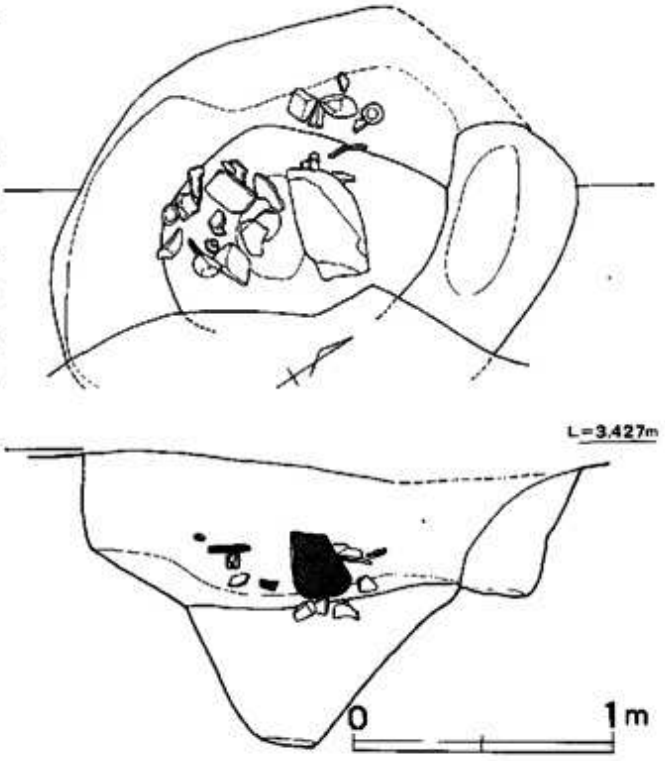


Fig. 8　8号土壙実測図（1/30）

の混入もあるが、それ以外は14C頃と考えられる。

D－12　D－5に切られている。遺物は量的に少ないが、混入がない。性格は不明である。

D－13　D－6・12に切られ、D－16を切る。弥生以降、14-5C頃までの遺物が混じる。遺構はほぼ1.8mの円形で、床面までの深さは1mを残す。骨片2点が出土している。

D－14　M－1、P－1・2に切られる。浅く不定形である。遺物は少なく、性格不明。

D－15　D－6に切られる。多量の遺物が出土している。古い遺物の混入も見られるが、下限は15-6Cにおさまる。遺構の大半は調査区外にかかっている。

D－16　D－13・14に切られる。遺物は少ないが、古墳時代遺物が混じる。切りあい、遺物から見ると、今回調査の遺構では最も古い様相をもち、11C頃と考えられる。

D－17　その大半は調査区外にある。近代撹乱である。

井戸1　近代の瓦組井戸枠をもつ井戸である。残存状態は良好である。

井戸2　D－4・5と重複する。瓦組の近世井戸である。井戸枠は最下面に辛うじて残されるのみである。井戸3より、わずかに新しい。

井戸3　井戸2同様近世の瓦組井戸である。最下位にのみ瓦組が残存する。

この他に、D－1・2・8など現代～中世の井戸かと思われる遺構も存在するが断定しがたい。

M－1　幅0.5m、深さ0.1mの浅い溝である。北をD－3に、南をD－5に切られ、良好な状態とはいえないが、現在の町割にほぼ平行で、磁北より20～25°西に傾く。

P－1　遺物はなく、小さく浅い。周辺に同様のピットが見られず、柱穴かどうかは不明。

P－2　径55cm、深さ0.07mと浅く円形でD－14を切る。遺物を含むが、いずれも小片である。ピットとするよりもむしろ小土壙と考えられる。

P－3　径0.6m、深さ0.6mの円形で、黒褐色の砂質土がつまる。遺物は多くないが、馬歯、骨片が見られる。小土壙と考えたほうがいい。

4．出　土　遺　物

今回の調査では、弥生時代から近代に到るまでの遺物が出土している。それらは、撹乱層・包含層・土壙・井戸・溝・ピットから検出されたものである。各遺構出土の遺物についても、撹乱層・包含層の例と同じく混入が目立ち、一括資料として扱えないものが多い。そのため、ここでは遺物の種類ごとにまとめて概要を述べることにしたい。また出土遺構の説明のないものは包含層、もしくは撹乱層の出土である。出土遺物は細片が多いが、図化しうるものはつとめて掲載したつもりである。なお、撹乱層には、近世以降の遺物も多量に見られるが、ここでは特殊なものについてのみ紹介する。

土師器皿・坏　(Fig.9－1～37、Fig.10－1～18)

土師器皿(Fig.9－1～25)および坏(Fig.9－26～37、Fig.10－1～18)は、半数以上

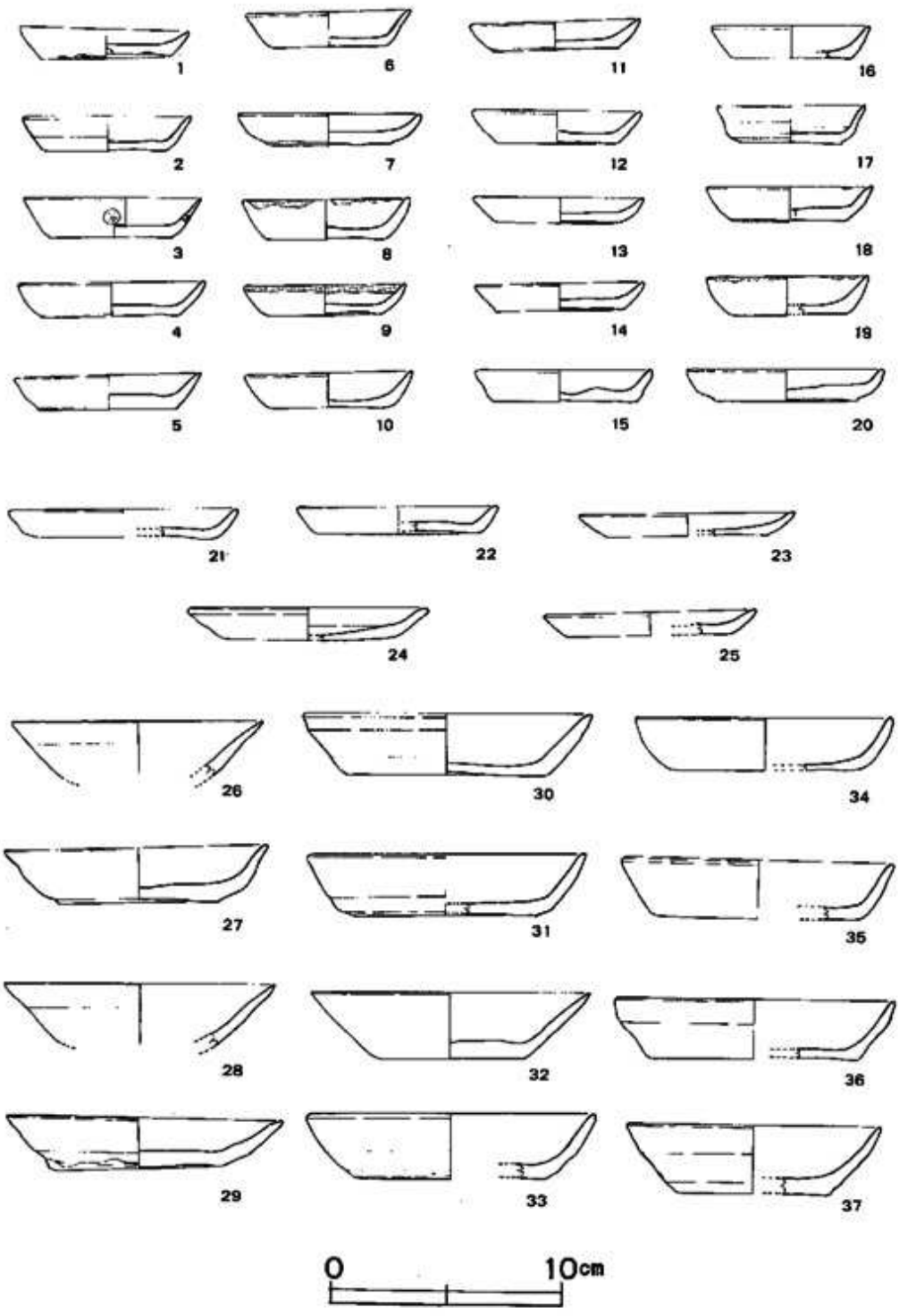

1
6
11
16
2
7
12
17
3
8
13
18
4
9
14
19
5
10
15
20
21
22
23
24
25
26
30
34
27
31
35
28
32
36
29
33
37
0
10cm

Fig. 9 出 土 遺 物 (1)

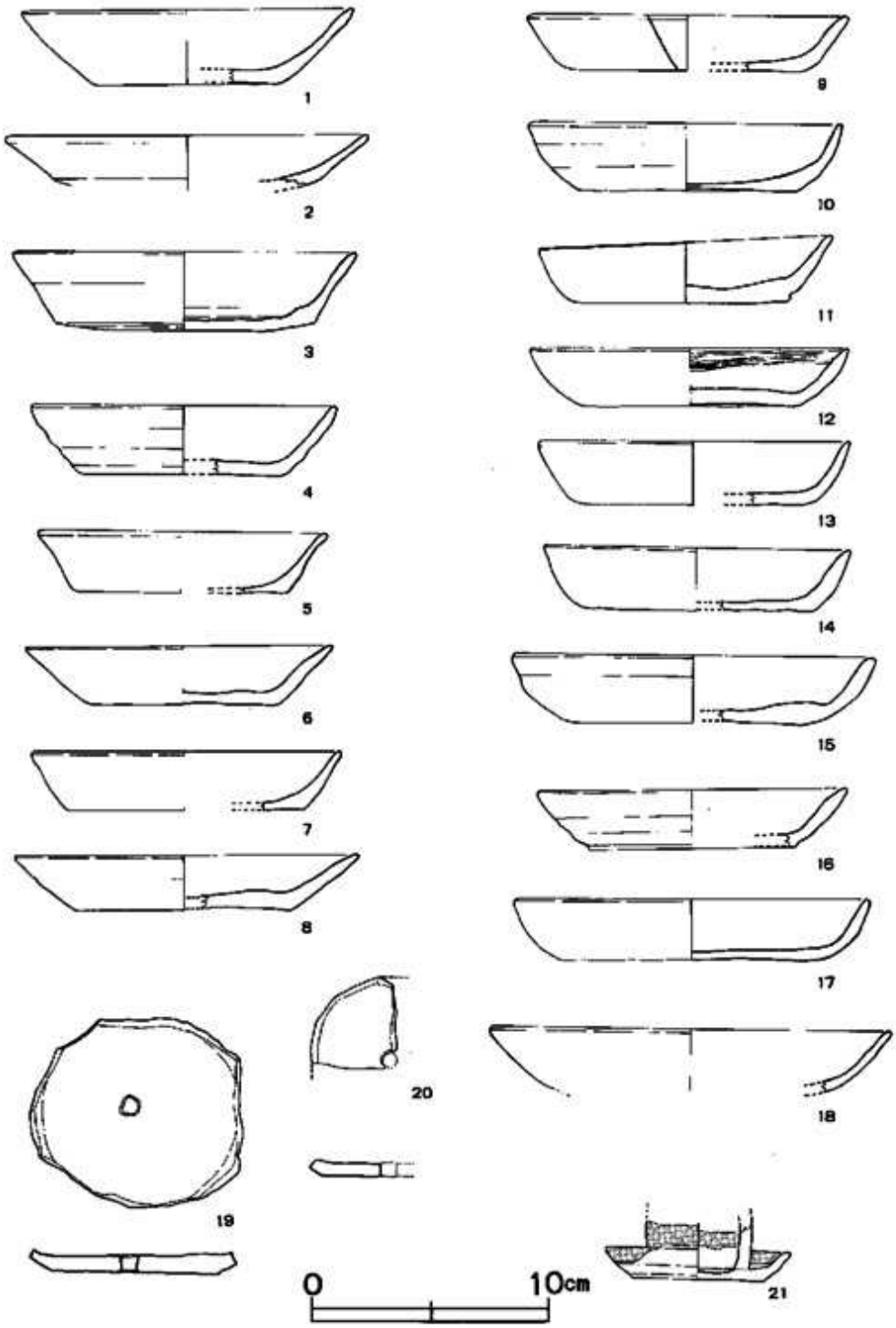


Fig. 10 出 土 遺 物 (2)

が破片からの復元実測で、また各遺構出土のものも混じりがあるため、ここでは細かい分類は行わず図示するのみにとどめ、特殊なものについてのみ二・三説明する。これらは平安末から江戸時代まで含まれている。

9－1は底に2ヶ所の凹みがある。同じく3には体部に内面から穿った孔が2ヶ所に見られる。9－8・9・18・19は燈明皿として用いられたものらしく、体部上半および口縁部に煤が付着している。大半が回転糸切りで、板状痕の残されるものもあるが、10－2は体部下半が肥厚し内面が滑らか。10－3はヘラ切りで板状痕が残される。10－18丸底などの例も見られる。出土遺構は次のようである。P－1…9－21、D－3…9－1、D－5…9－2・26～29、D－6…9－30、D－8…9－3～5・31・32、10－1・6、D－9…10－2・3・9 D－15…9－6～13・22・34・35、10－4・10～13・15、D－16…10－5、D－17…9－3・6

10－19・20は土師皿底部を用いた有孔の円盤である。20は¾破片。それぞれD－4、D－3出土。

土師器燈明皿（Fig.10－21）

土師皿内面底にさらに直立する体部を貼りつけたもので、内側口縁は欠矢するが、煤が付着している。底部糸切りである。江戸時代の所産であろう。D－1出土。

青磁碗（Fig.11）

いずれも破片で完形品はない。1は14C頃に一般的な鎬蓮弁文をもつ龍泉窯系の碗である。内外面に茶味の強いオリーブ釉がかかっている。2は体部外面に丸味のある細かい蓮弁文を施し、青白色の不透明釉がかかっている。D－4の出土。3は体部外面に、ヘラ描きの沈線でやや幅のある剣先形の蓮弁をもつもの。貫入の目立つ深緑の釉を施す。D－1出土。4は無文の龍泉窯系と思われる碗である。外面口縁直下にかすかな沈線がみられる。青緑色の釉を厚くかける。5は、体部外面に便化した雷文帯と下半に蓮弁様の文様を施し、内面体部にはヘラの片彫り草花文を描いている。青緑色の釉がかかる。6は体部外面にスタンプ様の雷文帯をもっている。うす緑の釉がかかる。D－6出土。7は、5と同様に体部口縁直下に便化したヘラ描きの雷文帯をもつものである。8は、端正な雷文帯を線描きしたもの。9は体部内外面に2本一単位のスタンプ様施文具で花弁文を表している。淡青緑色釉が厚くかかる。碗というより坏であろう。10は、体部外面に幅のせまい沈線で蓮弁様の文様を表わし、内面底近くに劃花文を描く。青緑色釉が厚く施されている。11は、龍泉窯系碗底部破片である。底部器肉が厚く体部下半は「く」の字状に屈曲する。内面見込には牡丹文のスタンプが押されている。くすんだオリーブ釉が、外面は高台外面までかけられ、スタンプ周辺は露胎である。胎土は赤褐色を呈し粗い。12は、ヘラの片切彫りで内面見込に花文を刻している。体部下半はやや開き気味に「く」の字状に屈曲する。底部の器肉は厚く、畳付部外半は斜めに削られている。くすんだ緑色の透明釉が外面底部と畳付の一部を除いて全面に施されている。胎土は

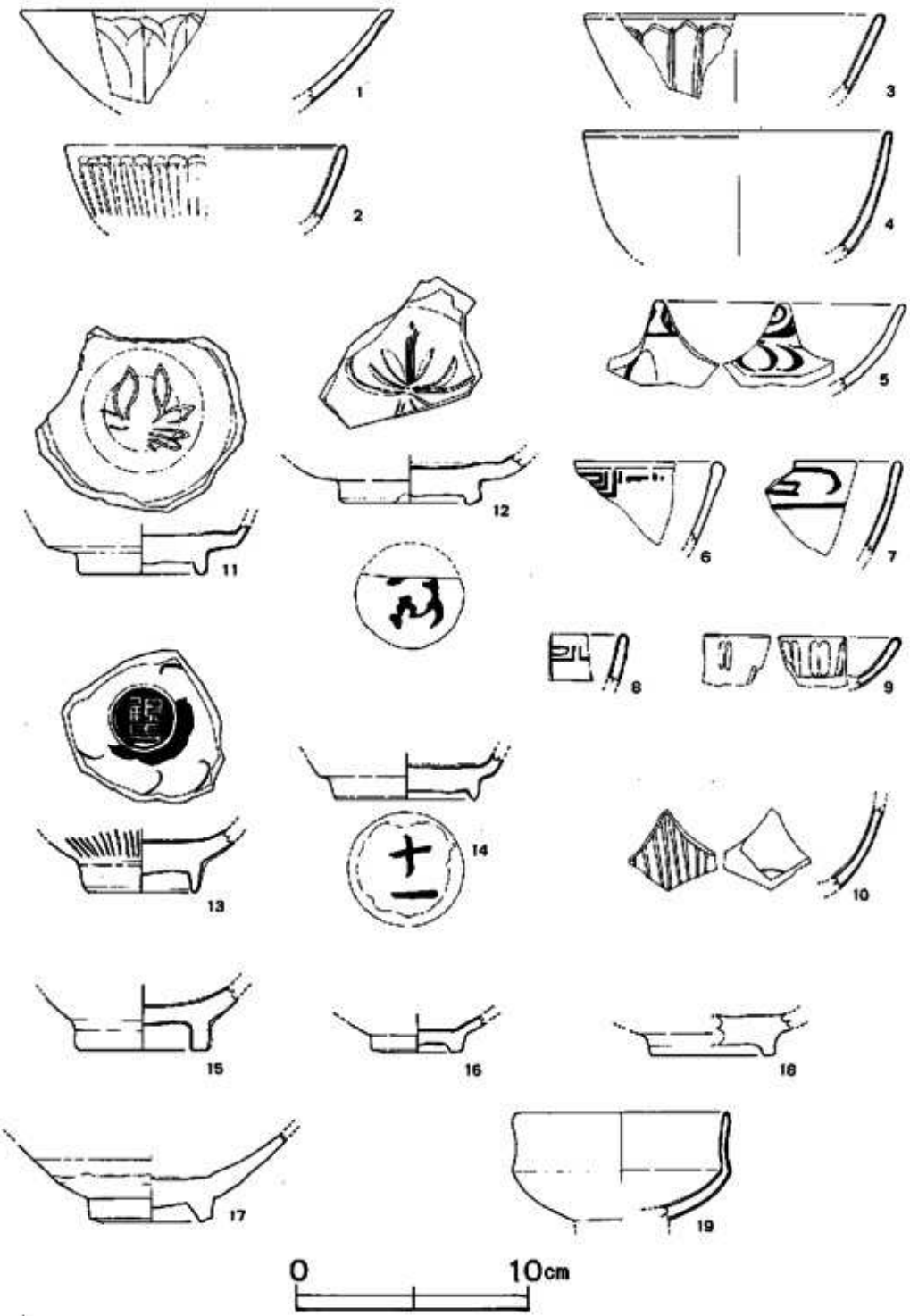


Fig. 11 出　土　遺　物 (3)

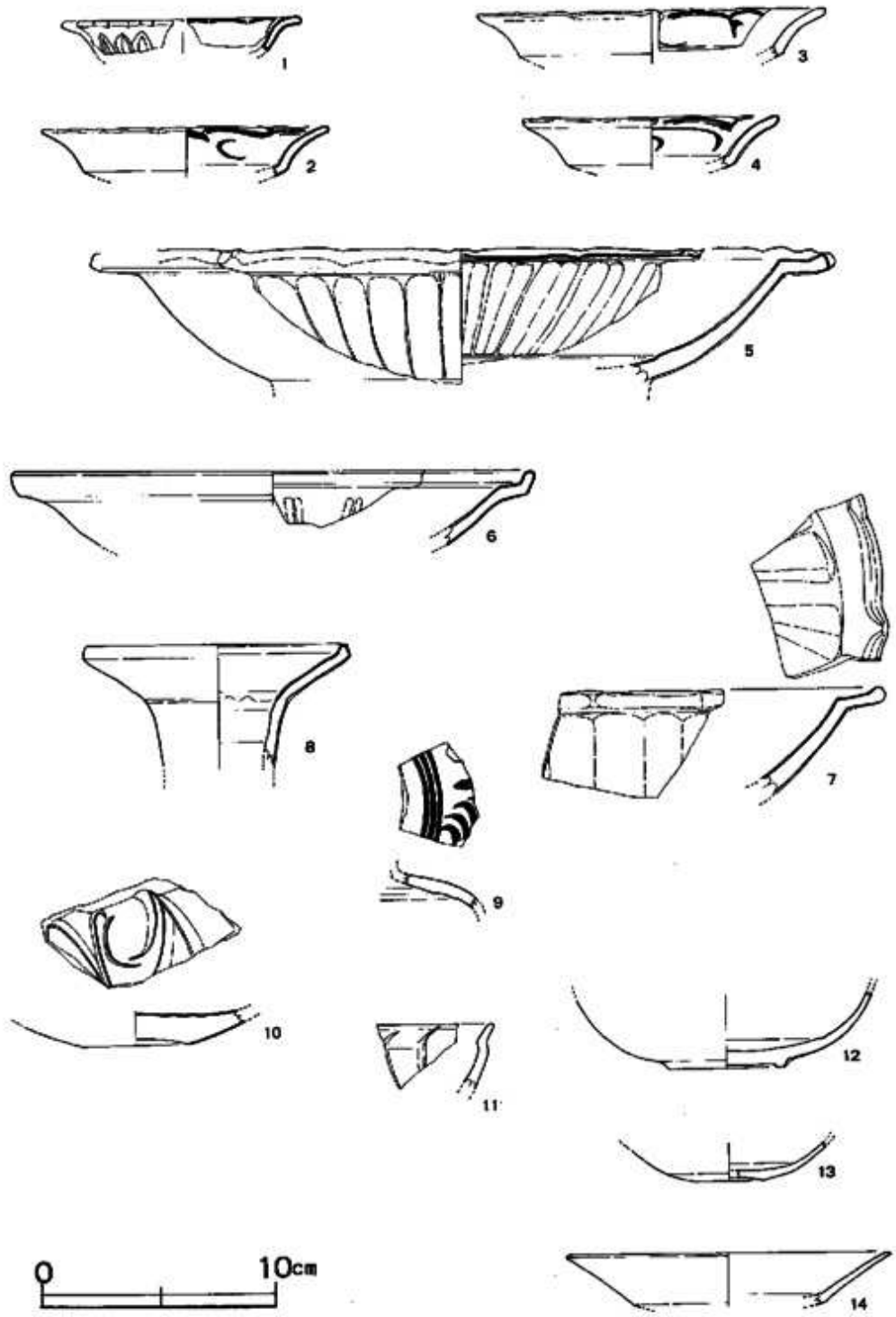


Fig. 12 出 土 遺 物 (4)

灰色で粗い。外底面には墨書が残されているが、文字は不明である。13は内面体部下半に線描きの花弁文を、見込に「顧氏」銘の印文を施している。外面体部には線描きの細かい蓮弁文を表す。高台は小ぶりで畳付断面はやや丸味をもっている。高台内部に輪状の露胎部を残す以外は、深緑の透明釉が全面に厚く施釉される。高台内面には目あとが残る。胎土は灰白色でやや粗い。14は、11・12と同様の器形であるが畳付はやや丸い。内面見込は幅広く輪状に釉を掻き取り、高台内部を露胎とする以外は全面に青緑色が厚くかけられる。底露胎部には「卜一」の数字を記した墨書が残される。D－15出土。15は高台が高く、底のえぐりも深く珍しい器形の底部である。畳付を除いて全面にガラス質の淡い緑色釉が厚くかかっている。胎土は灰白色で粗い。16は小碗の底部で、台形状の高台をもち、見込に段を有する。外面残存部は露胎である。内面には緑の強い淡オリーブ釉が施される。胎土はネズミ色で粗い。同安窯系のものであろうか。17は同安窯系である。台形状の厚い高台をもつ。体部下半と高台は鋭く削り出されている。内部および外面体部下半まで、緑褐色釉が施されている。18は11・12・14と同じ器形である。底部と高台部内面を除き、畳付まで含め全面に黄褐色釉が施される。D－10出土。19は体部上半がくびれて腰が張り、下半はは丸味をもつ碗である。淡青緑色釉が厚くかかる。胎土白色で良好。D－1胎土。

これらの資料のうち、2・3・5～8・10・13はいずれも15～16Cの時期に属するものである。

青磁皿（Fig.12－1～4・10）

1～4はいずれも体部下半が「く」の字形に屈曲し、口縁にかけすぼまるように外反する。口縁部は稜花をなし、緑の強いオリーブ釉が厚くかかる。1は体部上端に櫛描き様の雑な劃花文を、外面体部には、ヘラ描きの蓮弁文を施しており、復元によれば稜花は9弁となる。2～3は体部全面にヘラ描きの劃花文を施している。胎土はいずれも灰白色で粗い。2はD－5の出土である。10は底部破片であるが、見込にヘラの片彫り花文をもち、わずかな上げ底状の底部は釉が掻きとられている。大宰府分類(註1)の龍泉窯系青磁皿Ⅰ－1・bに相当する。

青磁盤（Fig. 12－5～7）

5は体部立ち上がりが丸味をもって内弯気味に立ち上がり、口縁部は鋭く外反している盤である。口縁は稜花をなして口縁端は上部がややふくらみ、その内面直下にヘラ描きで花弁文を施す。体部内外面は浅く幅広く削り取り鎬文をなす。また内面体部下位にゆるやかな段をもつ。淡青緑色釉を厚くかけ、胎土は灰白色でやや粗い。7も5とほぼ同形同大の盤で、釉調胎土ともに類似するが、わずかに体部内外面の削りが幅広く、器壁がやや厚いのみである。7はD－15出土。6は体部がやや内弯気味に立ち上がり、口縁部で強く外反して口縁端を鋭くつまみあげる。体部内面には、2本単位の軟かい沈線で鎬文を表わしている。茶味の強いオリーブ釉が厚くかかっている。5～7は、いずれも15～16C、明代の産であろう。

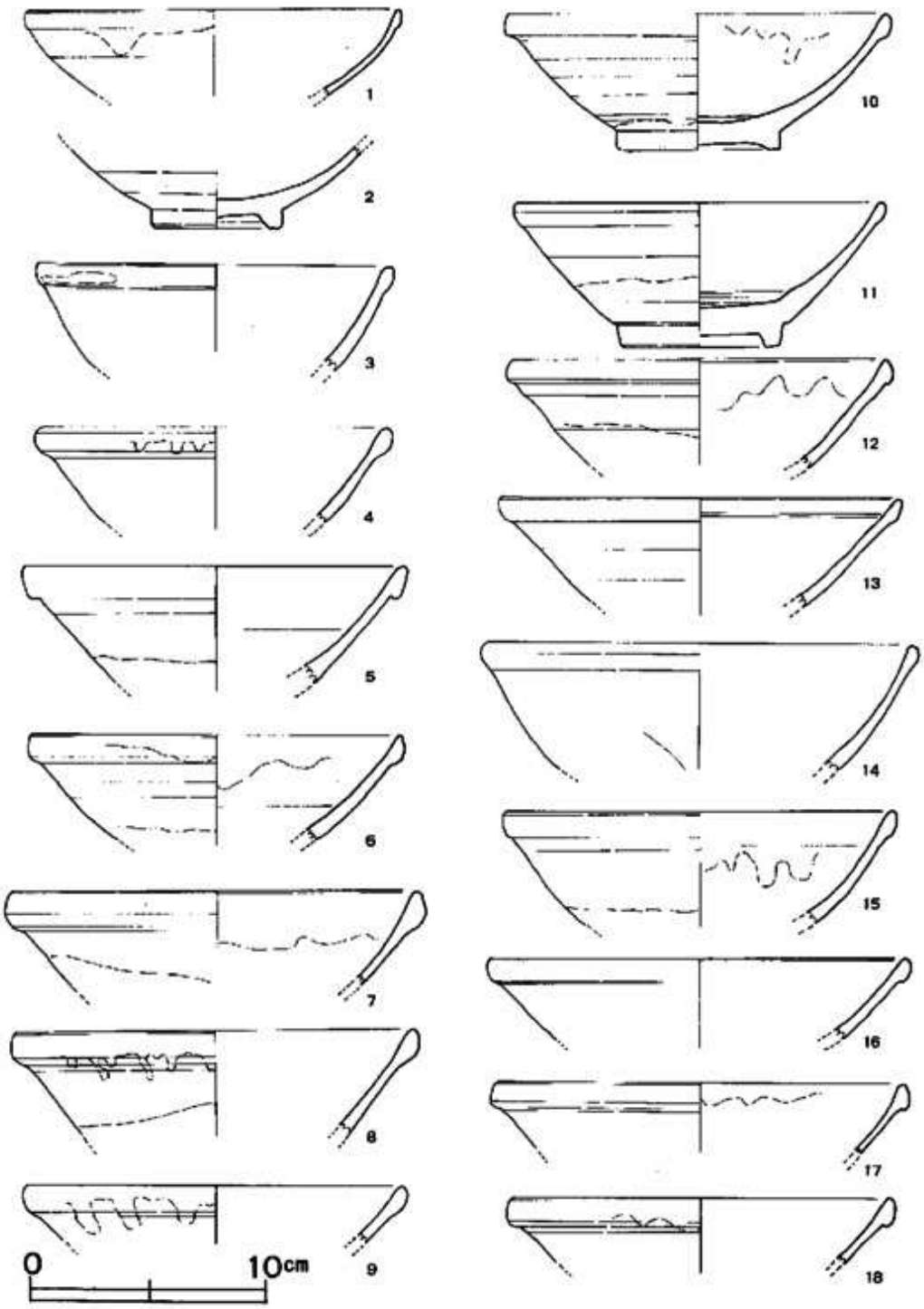


Fig. 13 出　土　遺　物 (5)

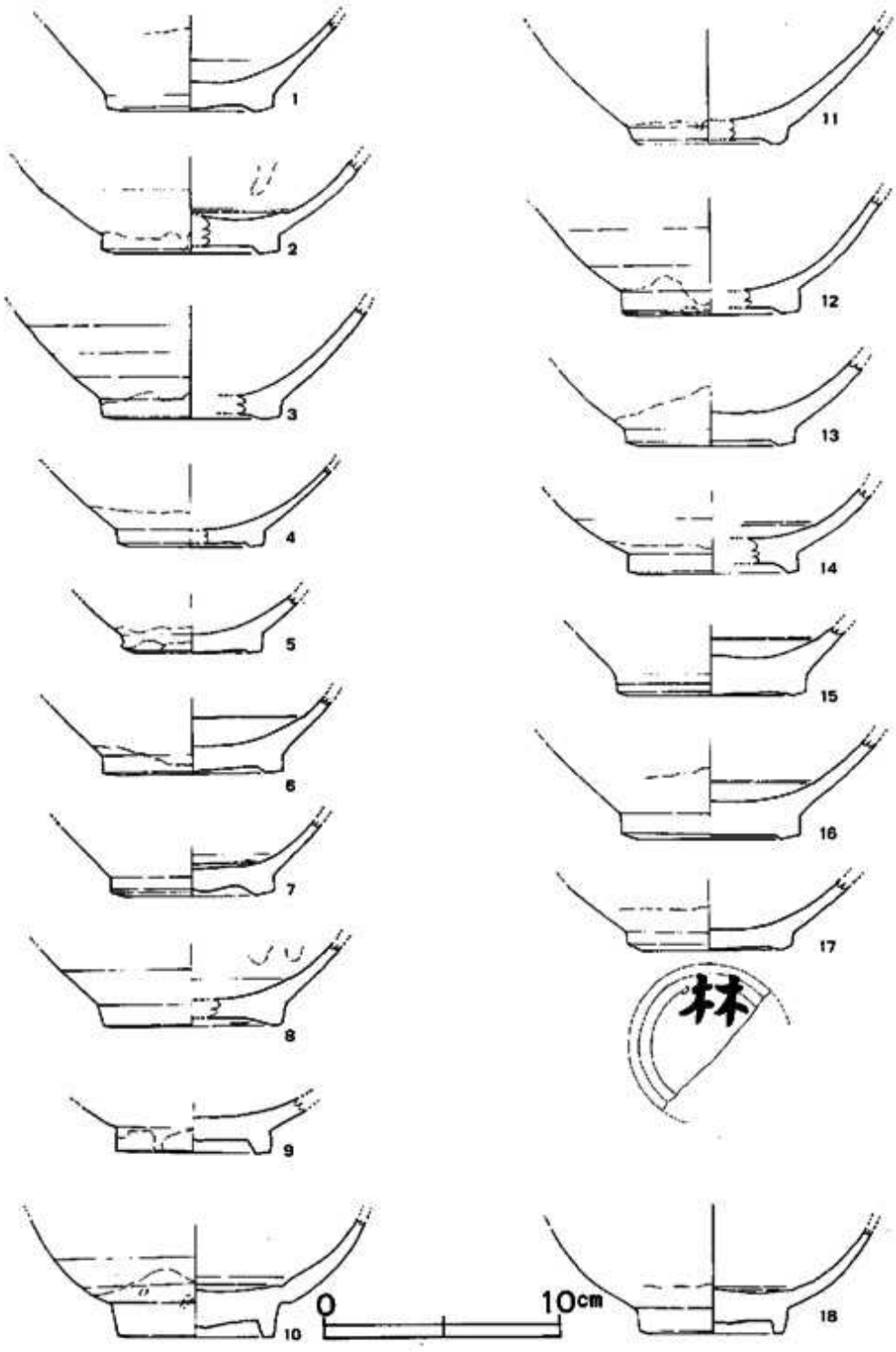


Fig. 14 出 土 遺 物 (6)

青磁壺 (Fig. 12－8～9)

8は花瓶の頸部上半以上の破片である。頸はやや開き気味に伸び、口縁にかけラッパ形に開き、口縁端は上方につまみあげる。淡青緑色釉を、内面頸部くびれ以上と外面に厚く施している。胎土は黒粒をわずかに含むが白色で精良。所属年代は明確にしがたい。9は壺の肩部破片である。頸部下に三条の沈線を刻み、以下にヘラの片彫りの草花文を描いている。きめの細かい灰青色の胎土で、緑味の強い淡オリーブ色のガラス質の釉を内外面に施している。D－13出土。

青白磁 (Fig. 12－11～14)

11は口縁下を内側にくぼませた天目碗形の碗である。外面にはヘラの片彫り沈線で花弁様の文様を施す。胎土は灰白色で精緻、内外面に青白色透明釉がかかる。D－13出土。12は高台が浅く削り出しもわずかで、体部は丸味をもちながら内湾しつつ立ち上がる碗である。内面体部下端には、浅い沈線がめぐる。外底面および畳付は露胎で、白色に近い胎土をもつがやや粗く、くすんだ青白色透明釉がかかる。P－3出土。13は外底をわずかに上げ底とした皿である。体部内面下位にかすかな沈線がめぐる。14は皿の口縁部破片である。体部は「く」の字形に立ち上がり外方にのびる。

白磁碗 (Fig. 13～16)

白磁碗は量的に多く、いくつかのタイプに分類される。大宰府分類(註2) を基準に分類しまとめて概観してみたい。

白磁碗Ⅱ類 (Fig. 13－1・2) 高台は外面を直に、内面を斜めに削り、体部外面下半はヘラ削り調整、体部は丸味をもち、小さな玉縁口縁をもつ。内面および、体部外面下半以上にうすい黄味の強い釉がかかり、貫入が多い。胎土はやや軟調。1はD－9出土。

白磁碗Ⅳ類 (Fig. 13、Fig. 14) 口縁の玉縁が大きく、器内も厚い。体部下半はヘラ削りで内面と外面体部下半まで黄または灰色がかった釉が施される。胎土は灰白色で黒粒を含み粗いが、焼成の程度により乳白色を呈している場合もある。高台は分厚く幅広で削り出しのわずかなものⅣ－1 (Fig. 13－10、Fig. 14－1～8、11～17) と、それより高く高台を削り出したものⅣ－2 (Fig. 13－11、Fig. 14－9・10・18) とに分けられる。また、13－11は内面見込の釉を輪状に掻きとっている。この類には内面体部下半に、沈線状の段をもつものが多い。14－17は外底面に「林□」の墨書が残されている。これらは12～13Cの時期に属するものと考えられる。13－7・8、14－12はD－4、14－3はD－5、14－10はD－8、13－5・6・15・17はD－9、13－13はD－12、13－4・9、14－9・11～14はD－13、13－3はP－2、13－14、14－4はP－3の出土である。

白磁碗Ⅱ－2類 (Fig. 15－5) 口縁に玉縁をもたず、丸くおさめているところに相違があるが、体部外面下半はヘラ削り調整で、高台は外面が直で内面が斜めに削り出されており見込みに段をもち、内面体部を白色の堆線で6区に分けている点は変わらない。釉は黄白色

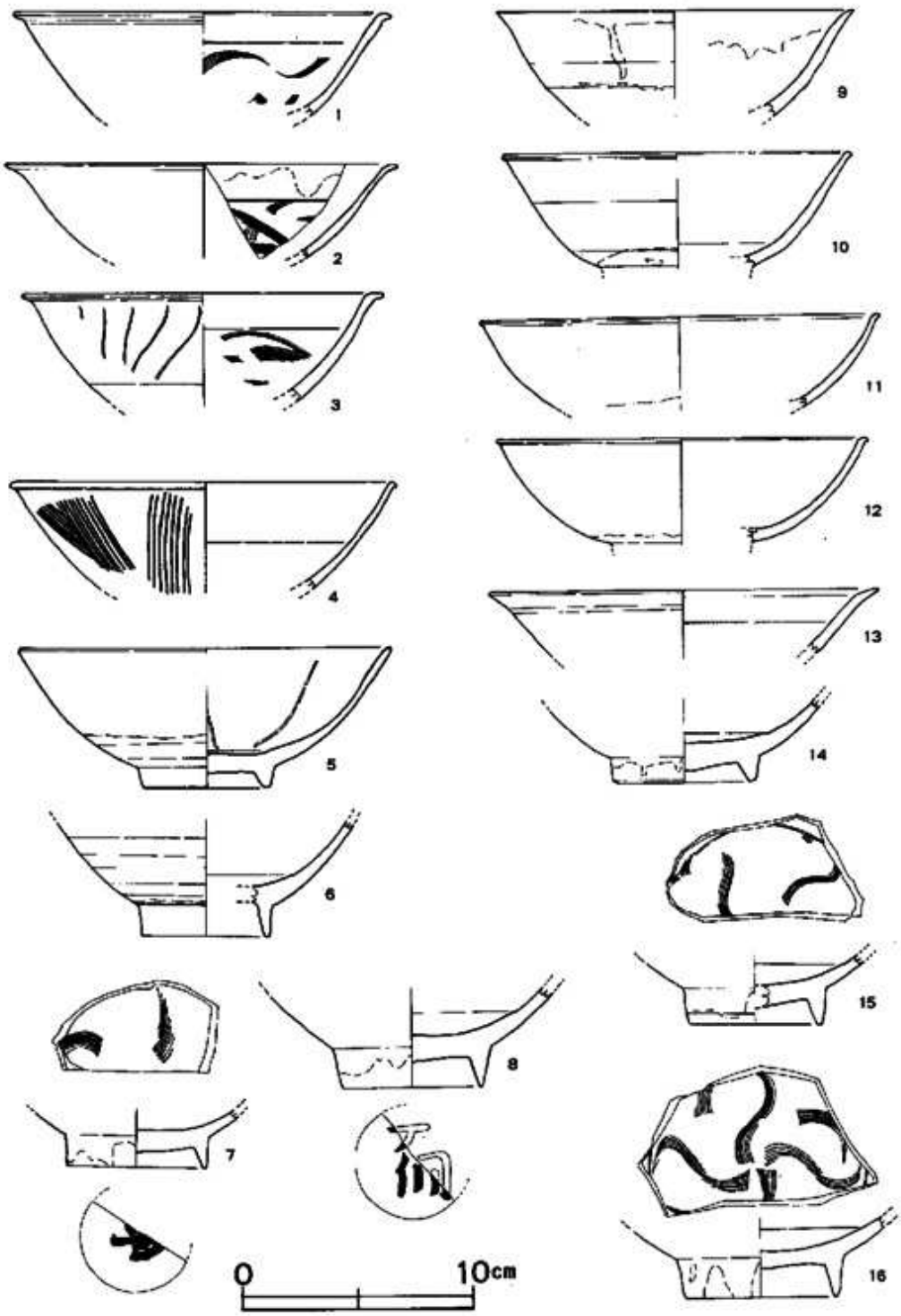


Fig. 15 出　土　遺　物 (7)

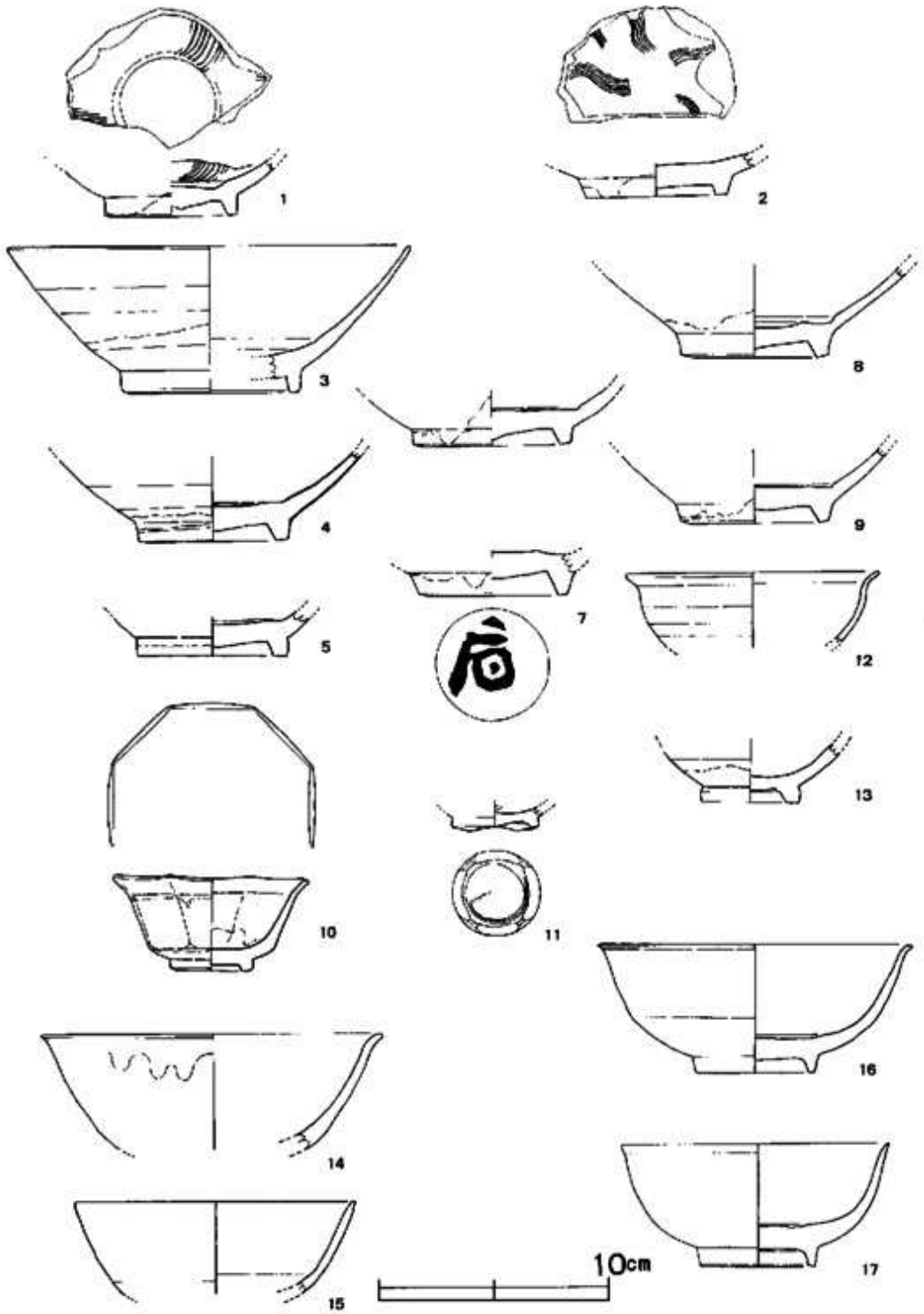


Fig. 16 出　土　遺　物 (8)

で内面と外面体部下半以上に施されている。D－12の出土。

白磁碗Ⅴ類 (Fig. 15－1～4・6・13・15・16)　細く高く直立した高台をもつもので、その形態によって細分される。Ⅴ－4 (1～3・7・15・16) は口縁端を外反させ平坦面を作るものである。内面体部口縁下に浅い沈線をもち、内面には櫛描きの文様を施している。3は外面体部にヘラ描きの沈線を刻んでいる。3はD－9出土。7・15・16は底部のみの破片であるが、いずれも見込に櫛描きの花文をもち、Ⅴ－4類に含められよう。7には底に墨書が見えるが半欠で不明。9・13は口縁部を外反させるもので、Ⅴ－2に属する。9は黄白色釉をかけD－13出土。13は黄緑色釉をかける。Ⅴ－3は口縁部を外反させ端部を丸くおさめるもので、4・10・11・12がこれにあたる。4は外面体部に櫛描きの施文をし、体部内面中位に細い沈線をもっている。D－9の出土である。12はD－13出土。6・8もともにⅤ類に属するものである。6はD－2出土。8は内面体部下に段をもち、底部に墨書が残る。半欠品であるが、第Ⅲ章で報告する冷泉1－7の資料に多く見られる「丁綱」銘のくずしに近くおそらくこれも「丁綱」であろうと考えられる。また14については、その形態が違いⅤ類に属するとは考えられないが、一応ここでは Fig. 15 中に仮に収めた。他より時期的に新しいものかもしれない。

白磁碗Ⅵ類 (Fig. 16－1・2)　Ⅴ類より高台が低い。1は内面見込に段をもち、体部に櫛目文を施しているものである。2は底部のみの破片であるが見込に櫛描きの花文を施している。

白磁碗Ⅶ類 (Fig. 16－3～9)　見込の釉を輪状に掻きとるものである。いずれも外面体部下半、もしくは高台外面上半まで施釉されている。7には底部に字義不明の墨書がある。

10・11は15～16C頃に属すると思われる白磁小碗(坏)である。10は体部下半で「く」の字状に立ち上がり、口縁部は外に開く。口縁および体部は八角形をなす。胎土は乳白色の軟調で白濁釉が外面体部下半までかかる。このタイプは近くでは東区蒲田遺跡 (註3) で2点出土している。11は10とほぼ同じ胎土、釉であり、蒲田遺跡例では高台を削ってアーチ状にしたものがあって、同形であろうと考えられる。これらは雷文帯をもつ青磁碗 (Fig. 11－4～8) に共伴するものであろうと考えられている (註4)。10はD－15の出土である。

13は肌色の胎土で、肌色の釉を施した碗である。高台上にくびれがあり、体部は丸く立ちあがる。李朝の茶碗であろうか。

14は黒粒を含む灰青色の粗い胎土で貫入の多い灰青色釉をかけるものである。李朝の白磁であろうか。D－9出土。

15～17は白色のきめの細い胎土を用いた碗である。16・17については、歪みがあるもののほぼ同形同大で、高台が高く、見込が輪状に掻きとられ、畳は白釉が掻きとられている以外全面施釉されている。畳付には砂粒が付着している。いずれも近世の国産であろうか。16はD－1出土。

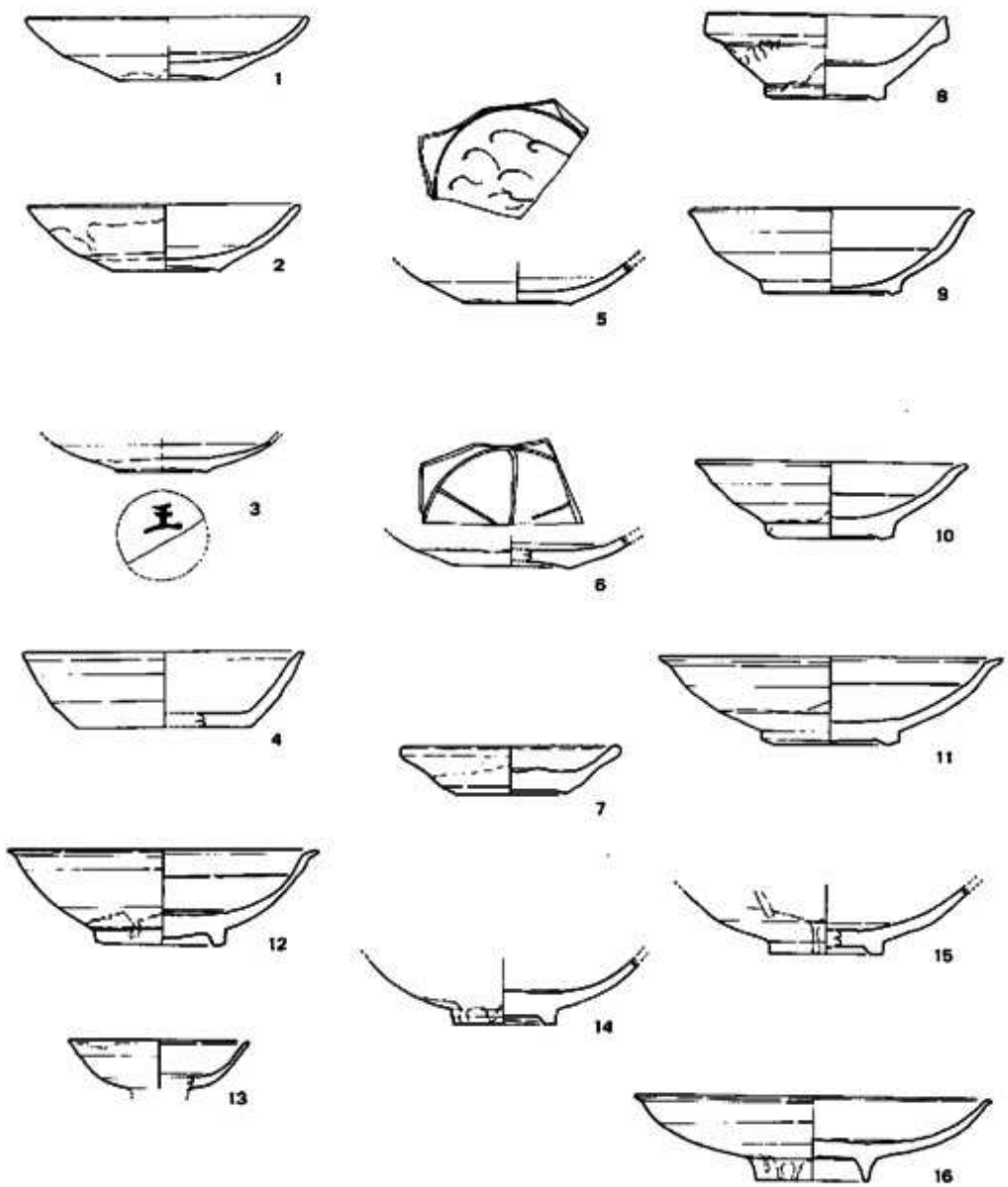


Fig. 17 出　土　遺　物 (9)

白磁皿 (Fig. 17－1～16)

白磁皿Ⅱ類 (Fig. 17－8) 底部が分厚く、口縁の断面が三角形を呈する。体部下半まで施釉される。

白磁皿Ⅵ類 (Fig. 17－1～3) 胎土は軟調で灰白色を呈し、細かい貫入があり黄味のある釉を外面体部下半までかける。内面体部下位に段をもつもの Ⅵ－1・b(1・2)と体部やや上位に段をもつもの Ⅵ－1・a(3)とに細分される。3の底には「王」銘の墨書がある。1はD－4、2はD－13の出土。

白磁皿Ⅶ類 (Fig. 17－5・6) いずれも底部破片で、釉調・胎土等はⅥ類と同じであり、それに含められるかもしれないが、ここでは、内面見込に文様が施されていることから一応Ⅶ類としておく。5には細線で飛雲文状のものが、6にも細線で花文が描かれている。

白磁皿Ⅸ類 (Fig. 17－4) 口禿の皿である。底は平らで、体部はやや内弯して外方に立上がる。底部まで施釉されている。

9～12は明確な高台をもち、口縁の外反する器形で、体部下半または高台外面まで施釉されている。これらは高台にそれぞれ特徴をもっており細分可能である。9はD－16、10・12はD－13、11はD－15の出土。

7は口縁が肥厚し、見込に輪状の高まりをもつものである。灰青色の釉が体部外面中位までかけられ、口禿である。多く見ない器形である。

13は小皿で、黄味のある灰白色釉がかけられている。見込は露胎で、輪状の釉の掻きとりがあると思われる。近世国産であろうか。

14～16は見込の釉を輪状に幅広く掻きとるものである。14・15は一般に安南産とされるもので肌色軟調の胎土に、淡黄緑色(14)、濃青緑色(15)の釉をかけるものである。16Cに比定される。16は細く高い高台をもち、胎土は白色で堅緻、青白色釉を厚く施す。中国産であろうと思われるが、年代は不明。15・16はD－5出土。

黄釉盤 (Fig. 18－1～9)

口縁部には1・3・4・5のように、バリエィションが見られる。5～9には内面底部および体部内面下半に魚文、花文等の鉄絵が描かれている。胎土はいずれも灰白色の砂粒を多く含み粗いが、1は内面に黄釉というより茶褐色に近い釉がかけられている。12～13C頃の所産であろう。1・2はD－15、9はD－13の出土である。

白磁鉄絵鉢 (Fig. 18－10・11)

10は体部上半が内弯しつつ立ち上がり、外方に分厚い鐔状の平坦な口縁が突き出す。内方にもわずかにせり出している。胎土は暗灰青色で、体部内面に鉄絵の草花文が描かれ、内外面に青灰色釉が施されている。また口縁平坦部内寄りに、大きな目あとが残されている。11も胎土、釉ともに同様の体部下半の破片である。畳付は平坦で、外底はやや上げ底となる。また体部下半まで施釉されている。

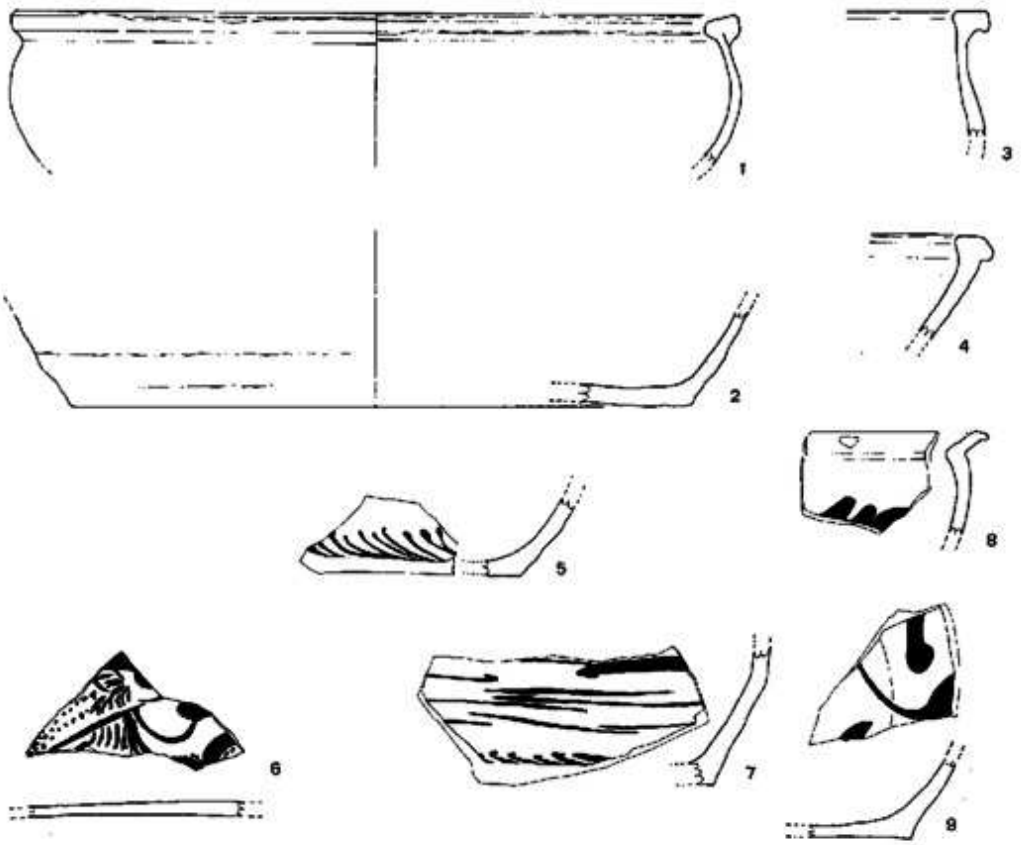


Fig. 18 出　土　遺　物 (10)

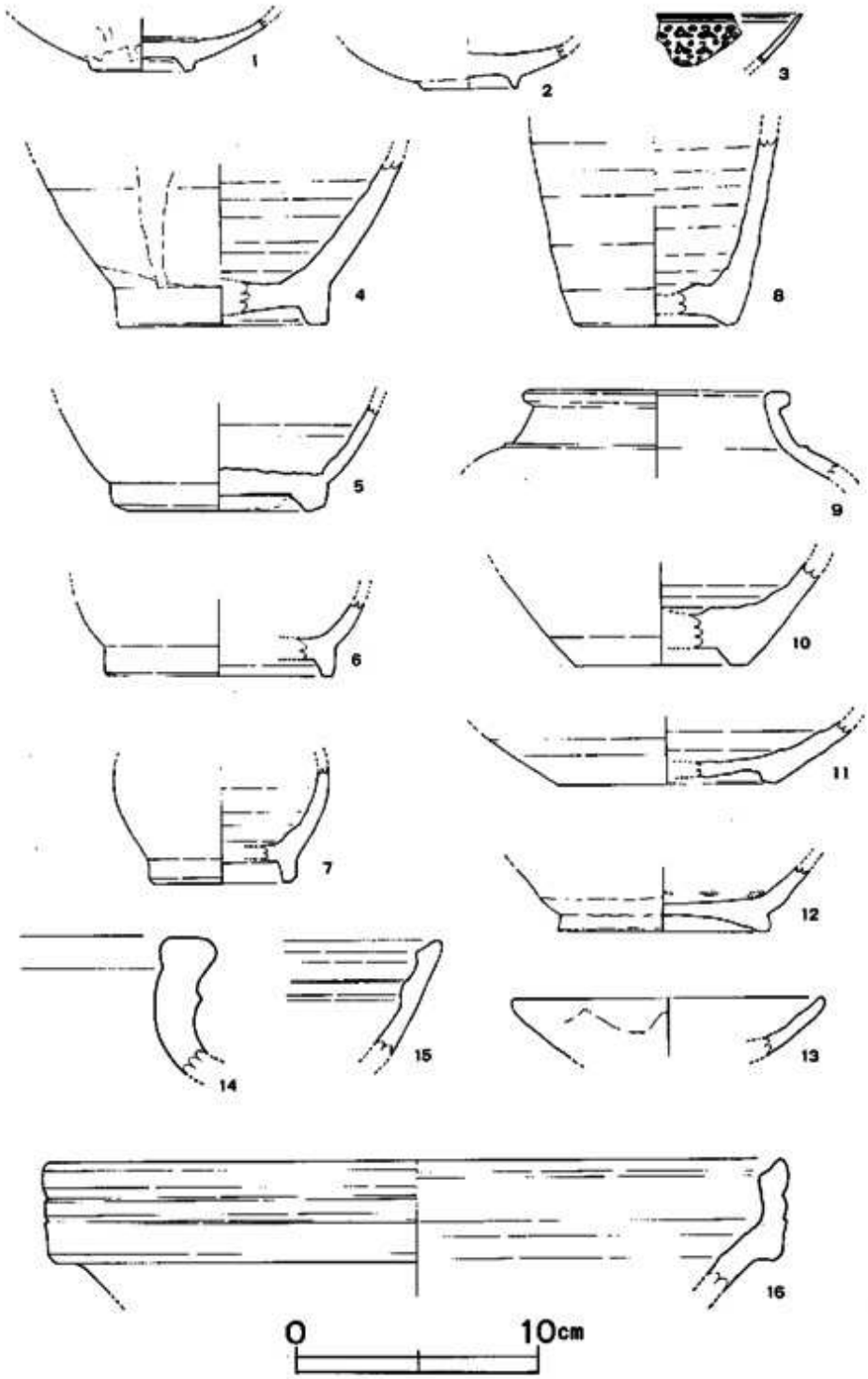


Fig. 19 出　土　遺　物 (II)

染付 (Fig. 19－1～3)

1と2は体部上半を欠失した皿である。白色の良質胎土で見込には輪状の釉の掻きとりがある。1は体部下半まで2は高台外面まで灰白色釉がかけられている。ともに破片上端に呉須の痕跡が残るのみ。近世国産品であろう。3は碗の破片。口縁部内外の直下に2条の線をめぐらし、外面体部に鳥形の連続文が描かれている。この文様をもつ染付は西区有田遺跡第24次調査(註5)で出土しており、16C、中国産と考えられる。D－1出土。

白磁壺 (Fig. 19－4～7)

いずれも体部下半底部の破片である。4は厚い器壁をもち、内面にロクロの整形痕が明瞭に残される。胎土は灰色で粗く、内面と体部下位まで灰白色釉がかかる。四耳壺であろう。D－5出土。5は器壁が薄く整形痕が内面に残る。高台は分厚く、胎土白色精良で黄味のある灰白色釉が内面および高台内側までかかる。6は胎土、釉とも5と同様で高台が細い。畳付まで施釉されている。7は小型で、高台が細く高い。内面は施釉されず、外面は底部まで施釉される。畳付には砂が付着している。近世の花瓶であろう。

雑釉壺 (Fig. 19－8～11)

8は緑褐色青磁釉を内外面全面にかけた瓶である。灰色で砂粒を多く含む粗い胎土で、整形痕が明瞭に残される。底部に幅広い目あとが残る。9は頸が短く肩が張り、内外面に褐釉を施した壺である。口縁は外に肥厚し、頸部付け根に段がつく。胎土は橙色で粗い。四耳壺であろう。10は褐釉壺である。「碁笥底」に近く肉厚である。内面には施釉されない。灰白色で黒粒を含む粗い胎土である。11も内外面に褐釉を施した壺である。「碁笥底」で黒粒を含む胎土。体部の開きからすれば鉢かもしれない。

雑釉鉢 (Fig. 19－12・15)

12は内面に褐釉をかけた高台付きの鉢である。内面に7ケ所の目あとが残る。底は凹んでいる。D－8出土。12は施釉はされないが、大量の砂粒を含む粗い胎土の鉢である。内面口縁直下に2条の突帯をもつ。

雑釉皿 (Fig. 19－13)

緑褐色釉が内面と外面体部上半にかかる。胎土は灰色で粗い。施釉されない面は橙色を呈している。

雑釉甕 (Fig. 19－14)

分厚い口縁のみの破片である。黒褐色の自然釉が薄くかかる。内面口縁下に丸味のある沈線がめぐり、頸部外面に低い突起をもつ。胎土は灰色で粗い。産地・年代は不明。

備前焼すり鉢 (Fig. 19－16)

体部は上半で直立する。内面口縁に凹みがあり、外面はヘラで2条の沈線を施す。16C後半以降であろう。

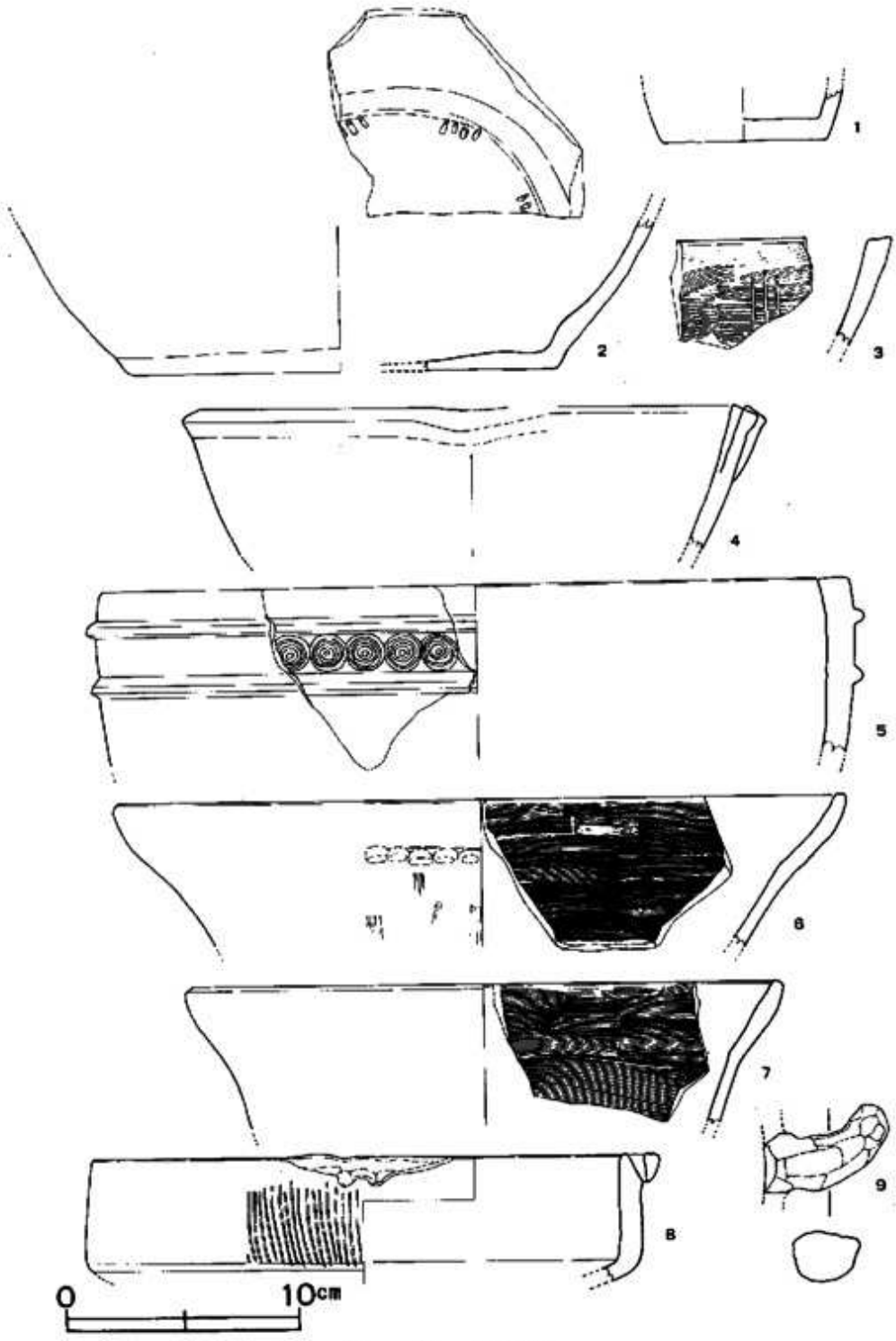


Fig. 20 出 土 遺 物 (12)

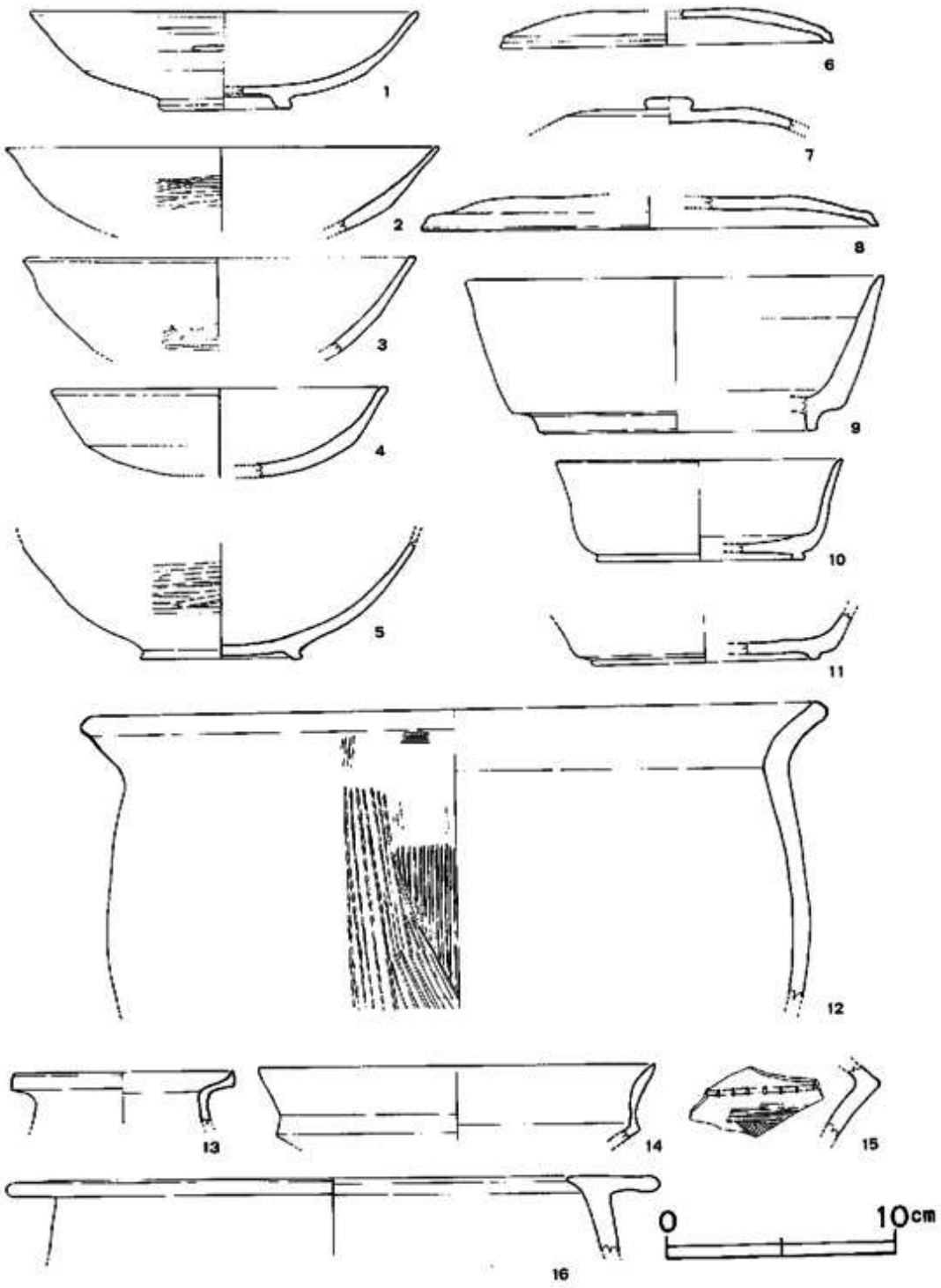


Fig. 21 出　土　遺　物 (3)

土師質・瓦質土器 (Fig. 20－1～9)

焼塩壺 (Fig. 20－1) 底部破片である。土師質で焼きは堅く、砂粒を含む粗い胎土である。大阪堺からもたらされたもので、江戸時代前半と考えられる。

瓦質すり鉢 (Fig. 20－2・3) 2の胎土は長石粒を含み粗い。体部外面はナデであるが内面は使用により磨耗がはげしく調整痕はおろか筋目も見えない。本来4本単位の筋目があったもので、底にわずかに痕跡が残される。3は外面ナデ、内面刷毛目である。

瓦質片口 (Fig. 20－4) 外面はナデ後刷毛目、内面は刷毛目の調整である。内面下半は剝落が目立つ。片口は口縁をわずかに外へ歪ませたのみである。

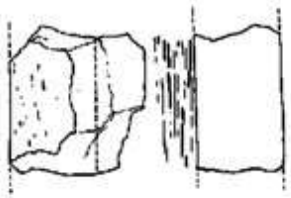
瓦質火舎 (Fig. 20－5) 内外面黒色に磨かれている。外面口縁直下に2条の突帯がめぐらされ、その間に同心円文のスタンプが施されている。D－5の出土。

土師質土鍋 (Fig. 20－6～8) 6・7ともに口縁が外反し肥厚するもので、外面は指ナデ、内面は細い刷毛目調整である。外面には煤が付着している。8は器高の低いもので口縁外面に有孔の把手が貼りつけられている。外面体部には櫛目が施され、内面は横ナデ調整である。器形としては別の名称が考えられようが、ここでは一応土鍋としておく。江戸時代の所産であろう。

土師質把手 (Fig. 20－9) 手づくねである。年代は明らかにしがたい。D－8出土。

土器碗類 (Fig. 21－1～5)

1は瓦器碗で、内面と外面体部上半が銀黒色でヘラ磨きされている。2・3・5は内外面の体部上半のみが黒色を呈する瓦質碗である。外面体部上半と内面がヘラ磨きされている。4は研磨土器で土師質、内外面ともにヘラ磨きされている。3はD－8、4はP－3の出土である。



須恵器 (Fig. 21－6～11)

6～8は坏蓋。6は全体をナデ調整で仕上げているが、7・8は天井部がヘラ削りで、体部をナデ調整している。6は口縁外面に凹線をつける。9～11は坏であり、ともに小片である。高台付で全面ナデ調整を行なう。9は軟質で須恵質といえるものである。9・11はD－13出土。

古墳・弥生時代の土器 (Fig. 21－12～16)

12は甕形土器である。口縁部は内外面横刷毛目、体部は外面が縦の刷毛目、内面はナデ調整である。胎土には多量の長石・雲母を含んでいる。D－11の出土。13は壺形土器と思われる口縁部破片。胎土には砂粒を含むが、雲母も多く、焼成良好で堅緻、内外面ナデ調整を行なう。14は二重口縁をもつ壺形土器の

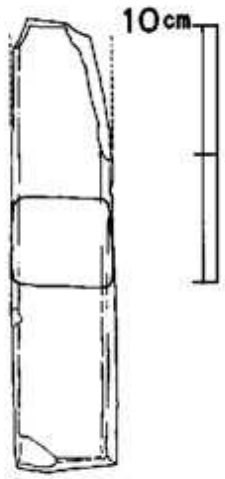


Fig. 22 出土遺物 (4)

口縁部破片で、胎土には砂粒・雲母を含み、焼成良好で堅緻、内外面ナデ調整である。D－12出土。15は二重口縁をもつ壺形土器の破片である。砂粒・雲母を含み、内外面刷毛目調整稜に刻みをもつ。D－13出土。12～15は弥生時代終末から古墳時代前期に位置づけられるものである。16は甕形土器口縁で、弥生時代中期の所産である。D－2出土。

鋳物関係遺物（Fig. 22－1・2）

1は鞴の羽口破片である。胎土は粗く器面も荒れている。D－3出土。2は瓦質の方柱状支脚で、一端を欠損しており、一部に煤が付着している。時期はいずれも不明。

その他の遺物

図示はしてないが、瓦・鉄釘・滑石製石鍋小破片等が出土している。漆器の漆膜のみが3点出土しているが微細である。また近世・近代の陶磁器類も多量に出土しているが、いずれも撹乱層等からの出土であり、今回の報告では扱っていない。また、黄白色砂層（地山）の直上で、古墳時代土師器がややまとまって出土している。小破片であり、遺構をともなっていない。骨片も多い。微小なものがほとんどである。P－3からは馬歯が1点出土している。（PL．14）

註1　横田賀次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4　1978
註2　註1に同じ
註3　福岡市教育委員会「藤田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告第33集　1975
註4　亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」渡山猛先生古稀記念　古文化論攷　1980
註5　福岡市教育委員会「有田・小田部第1集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集　1980

5．ま　と　め

冷泉町474－9地内の調査は、わずか54㎡という狭い範囲の調査であったが、いくつかの成果と問題を導き出してくれている。ここでは、それらについて二・三述べまとめとしたい。

貿易都市博多の特殊性が顕著に現れるのは平安時代末から桃山時代にかけてであり、その時期における陶磁器類の比分率は博多の特殊性を端的に表わしているともいえる。

今回の調査で出土した遺物のうち、瓦を除いた土器・陶磁器等の用器類は、微細な破片まで含めて総数2,681点を数える。そのうち弥生土器3点、古墳時代土師器71点、江戸時代以降のものと考えられる陶磁器583点を除いた、平安時代末から桃山時代に属すると思われる土器・陶磁器類は2,069点である。この2,069点を100%とし、それぞれの比を述べてみたい。

国産品と考えられるものは1,268点、61.3%を占め、その内訳は土師器皿・坏－616点、29.8%、土師質土器－278点、13.4%、須恵器・須恵質土器－145点、7%、黒色土器・内黒土器等の瓦器椀類－22点、1.1%、瓦質土器－109点、5.3%、その他の陶器等－98点、4.7%であり、土師器皿類が国産品の約半数を占めている。これに対し中国産と考えられる陶磁器は786点で、全体の38%という高い比率であって、そのうち白磁は556点で26.9%、中国陶磁の¾にあたり、中でも碗が489点と多く白磁の9割近くを占める。青磁は100点、4.8%であるがやはり白磁同様に碗が多く80点を数える。青白磁は合子、碗、皿、それぞれ2点で、わずか

に0.3%を占めるにすぎない。また黄釉盤は28点、1.4%、その他の陶器類は96点、4.6%である。この他朝鮮産・安南産と考えられるものもあるが、15点で0.7%と少ない。但し、ここで述べた数値については、産地の同定・所属時期の決定等の細かい問題点もある上、約500年間にわたる遺物を一括して扱っており、調査区の狭少なことによる遺物の偏りの可能性も含めて、必ずしも正確な個体数の比率を示しているとは考えておらず、一応大まかな目安であると理解せねばならない。より高い蓋然性を求めるためには、更に綿密な幾つかの手続きを経る必要がある。

この中国陶磁の比率を二・三の遺跡と比較してみると、大阪府高槻市内における遺跡の平均が1.5%(註1)、多量の中国陶磁を出土している広島県草戸千軒町遺跡でも約1%にしかすぎず(註2)、本遺跡と同じく博多に所在する冷泉町7－1地内における中国陶磁の比率も、第三章で述べられているように高率である。また、博多近隣の村落集落であると考えられる福岡市南区五十川高木遺跡A地点(註3)においても土師器・土師質土器約500点に対し、中国製磁器が約300点と高率を示している。博多およびその近辺においては、位置的優位性から中国陶磁の所有層は、一部の上物を除き、広汎な階層にまで及んでいたと考えられる。

また、15・16Cの青磁・白磁等が比較的まとまって出土したことがあげられる。既往の調査では13・14Cの遺物は膨大な量に達しているものの、戦国大名の抗争の場と化した15・16C頃の遺物は極端に少なく、博多の空白期的な様相を呈していたのであるが、これらの資料の出土によって、平安時代末から鎌倉・室町・戦国の各時代を経て江戸時代へ到る博多の連綿とした営みを把握しうることになったのである。このことは、撹乱層と理解して上層部分を機械で除去していたこれまでの調査の一つの反省点でもあることを率直に認めなければならない。

また調査上の問題点として、開発面積に対する調査区面積の割合が小さいものであったことがあげられる。これは、基盤が崩壊しやすい砂層であり、遺構最下面までGL－5mという条件、開発地が家屋の密集する市街地内であるという条件から、止むを得ないという判断によっている。しかし、博多における今後の再開発も、建坪のせまいビル建設等が多いと予想されるだけに、安全対策、調査の技術的・予算的面の整備も行なってゆかねばならない。さもなくば、小発掘・試掘のみに終止し、広大な広がりをもつ博多遺跡の、まさに九牛の一毛に博多の復元を頼らねばならぬ可能性も生じてくる。

註1：高槻市教育委員会「上牧遺跡調査報告書」1980
註2：松下正司「草戸千軒出土の日本陶磁」『草戸千軒42』1976
註3：福岡市教育委員会「五十川高木遺跡」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1975

本章の編集と執筆は池崎が行なった。整理には日野孝司、日野光嗣氏の助力を得た。また遺物の実測・トレースは大半を池崎が行なったが、一部常松幹雄氏の手を煩した。写真は、現場写真の一部を池崎が撮影し、以外はすべて白石公高氏の撮影によるものである。記して感謝したい。

第Ⅲ章　博多－B－(1)図版編

——福岡市博多区冷泉町７番地の調査——

本章で報告する地点は福岡市博多区冷泉町7番地の1に所在する。地点名は博多－B地点とする。博多－B地点は博多駅から築港へ、ほぼ南北へ抜ける大博通りと、天神から緑橋へ、ほぼ東西へ抜ける国体道路との交差点の北西角にあって、黒田家第２代藩主忠之の菩提寺である東長寺の道を挟んだ正面に位置する（Fig.23）。開発行為者は日本弘信産業株式会社で、開発の利用目的は共同住宅（マンション）である。調査対象面積1,982.90㎡で、調査面積は付近の住宅の安全を考えて、約1,100㎡にとどめた。本地点の開発を文化課が知ったのが、開発申請に対する許可が出された後で、施工期にさしかかっていたが、日本弘信産業の文化財に対する御厚情を給わり、調査要請に快諾を頂いた。慎んで関係各位に感謝申し上げる次第である。調査は昭和54年12月に始まり、翌55年３月に完了した。

検出遺構は土壙が207個、溝が３本、柱穴が162個である。土壙は井戸として認められるものが15個あって、大きな掘り方の中央に、円い桶を２段に組み合わせるものがほとんどで、瓦を組み合わせ、円と為し、それを十数段重ねる近世の井戸も含まれる。その他の土壙は性格が明確でなく、方形、長方形、円形、不整円、楕円形のものなどである。溝は真北に直交する東西方向のものが２条で、現在の街並方向のものが１条である。真北に方位をとる東西南北の溝は他の地点、特に地下鉄路線で数多く見られるものである。これら東西南北の溝が、太閤街割り以前を示している事は言うまでもないが、「大唐街」・「宋人百堂」と関係あるものか、博多町人衆の意志統一の結果なのか、はたまた、政治権力の強制によるものなのか、遺物の整理・文献等の総合的な意見交換によって結論は解釈されるべきであろう。162個の柱穴は組織的に把握されるものではなく住居形態を想定復元する事は困難である（PL 15～22参照）。

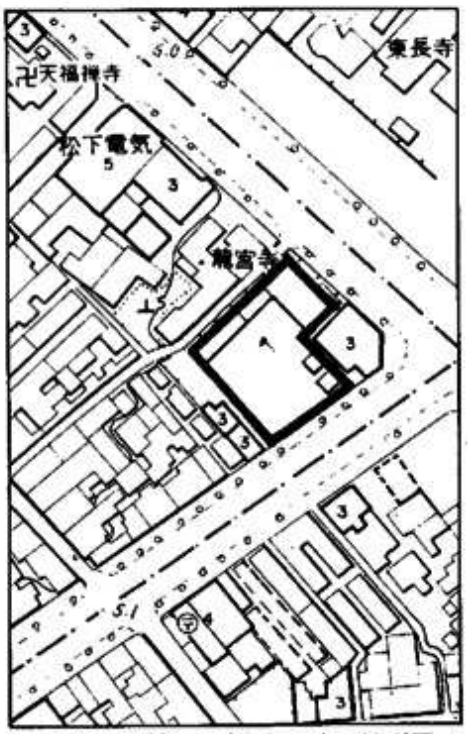


Fig. 23　博多B（冷泉7-1）の地形図
(2,500分の1)

検出された遺物は148,113点ある。この内、中世陶磁器が142,425点ある。この中世陶磁器の中で、国内産と思われるものが108,152点で、残り34,273点が輸入陶磁器で、全体の24パーセントである。輸入陶磁器の内容は、白磁16,907点（11.9%）

青磁6,049点(4.2%)、青白磁284点(0.2%)、緑釉16点(0.01%)、陶器10,933点(7.7%)、天目84点(0.06%)である。

国内産の中世陶器は108,152点あり、全体の76パーセントをしめる。その内容は土師器103,264点(71.9%)、瓦質土器2,504点(1.7%)、須恵器1,578点(1.1%)、瓦器806点(0.6%)である。

その他、瓦が3,351点、石製品が1,013点、古銭が約200点ある。古銭200点の内180点は1つの井戸底より検出されたものである。

遺物の中で特記されるものとして墨書磁器がある。その内、「丁綱」銘のものが41点あり、器種は白磁碗・白磁皿・天目・白磁四耳壺・同安窯系碗・青磁皿等、各器種に亘って検分できる。横田賢次郎・森田勉氏の編年を借りれば白磁碗のⅣ・Ⅴ類が多数をしめている(大宰府出土の輸入中国陶磁器について——九州歴史資料館研究論集4・1978年)。その他、所有者に関係があると考えられるものは「木?」・「吉?」・「朱」・「僧器定」・「王?」・「太」・「銭?」・「恵?」・「仁」・「徳」・「康?」等があり、いずれも中国人に関係ありそうである。思うに、博多湾海中の烏天目に記された「張綱」銘は、13世紀に筥崎宮に関係し、中世博多で活躍した綱首張興・張英・張光安等と関連付けられている(川添昭二「古代・中世の博多」博多津要録第一巻・西日本文化協会1975年)。本地点出土の墨書陶磁器の存在意義も、古文書学的追求を期待したい。その他役職名として「綱司」の墨書黄釉盤がある。兎にも角にも、全ての墨書が中世の博多を特徴づけるものばかりで、中世貿易港「博多」の行動領域が偲ばれ、興味深い。今後、関連諸科学の先達に御相談申し上げ、多方面からの遺構・遺物の追求を計りたいと考える。

本書の巻頭に掲げた天然色の図版は全て博多一B地点出土の中国輸入陶磁器である。特徴あるものを取り上げ若干説明申し上げる。

巻頭Ⅱの上段は黄釉褐彩盤で福建省泉州付近の磁灶窯系と考える。中段左は低火度鉛釉で掻落しの瓶と黄釉褐彩の陶器で、灰褐色の胎土をもつものである。産地不詳で先学の御教示を乞うものである。下段左は白磁鉄絵鉢・青磁劃花瓶・印花碗である。白磁鉄絵鉢は広東省の広州西村古窯の産、青磁劃花瓶は北宋期の越州系、印花碗は耀州窯系とそれぞれ考えられる。類例は非常に少ない。下段右の朝鮮系の青磁は掲載されたものが全てで、非常に少ない。

巻頭Ⅲは国内各地で一般的に出土する輸入中国磁器類である。中・下段各左の白磁皿が数量器種とも豊富である。

巻頭Ⅳの上・中段は陶磁の器種を示した。いずれも産地不明で今後の課題である。中(下)段の右は青白磁で陽刻・印文を特徴とした、福建省徳化窯のもの(右上)も含まれる。下段右は江西省景徳鎮窯系(左)と同安窯系(右)の特色が認められる。

本地点出土の輸入陶磁器は11世紀代を少々含み、12・13世紀を中心として、14世紀までの器種がみられる。各器種の詳細については第2部の実測図・写真の掲載をもって論ずる事とし、説明の不足は悪しからず、お許しを乞うところである。

図　　版

PLATES

1．調査区近景（北東より）

2．調査風景

1．遺構全景（西より）

2．遺構全景（東より）

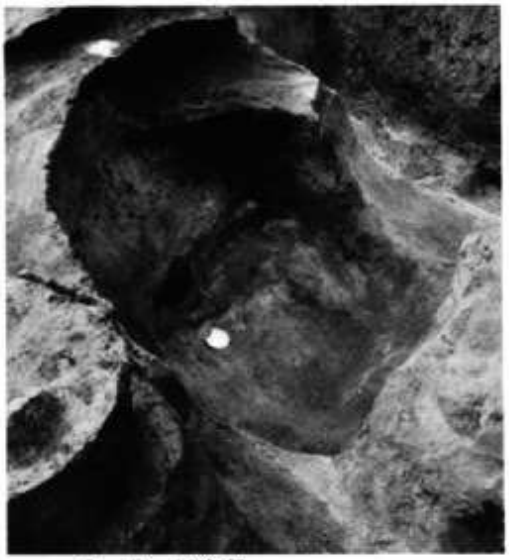
1　D－6全景

2．D－6滑石製人形出土状態

3．D－6滑石製人形出土状態

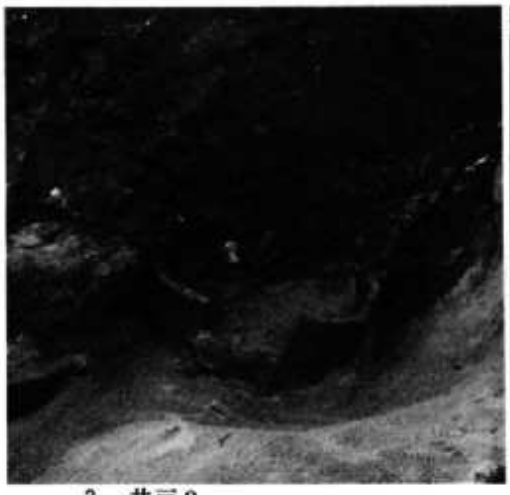
4．D－8全景（上面）

5．D－8全景（完掘後）

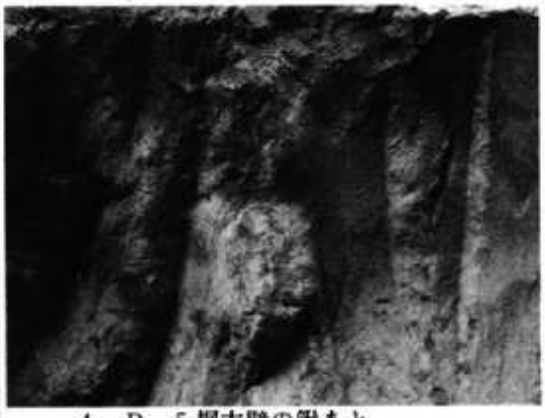


1．D－13全景

2．M－1全景

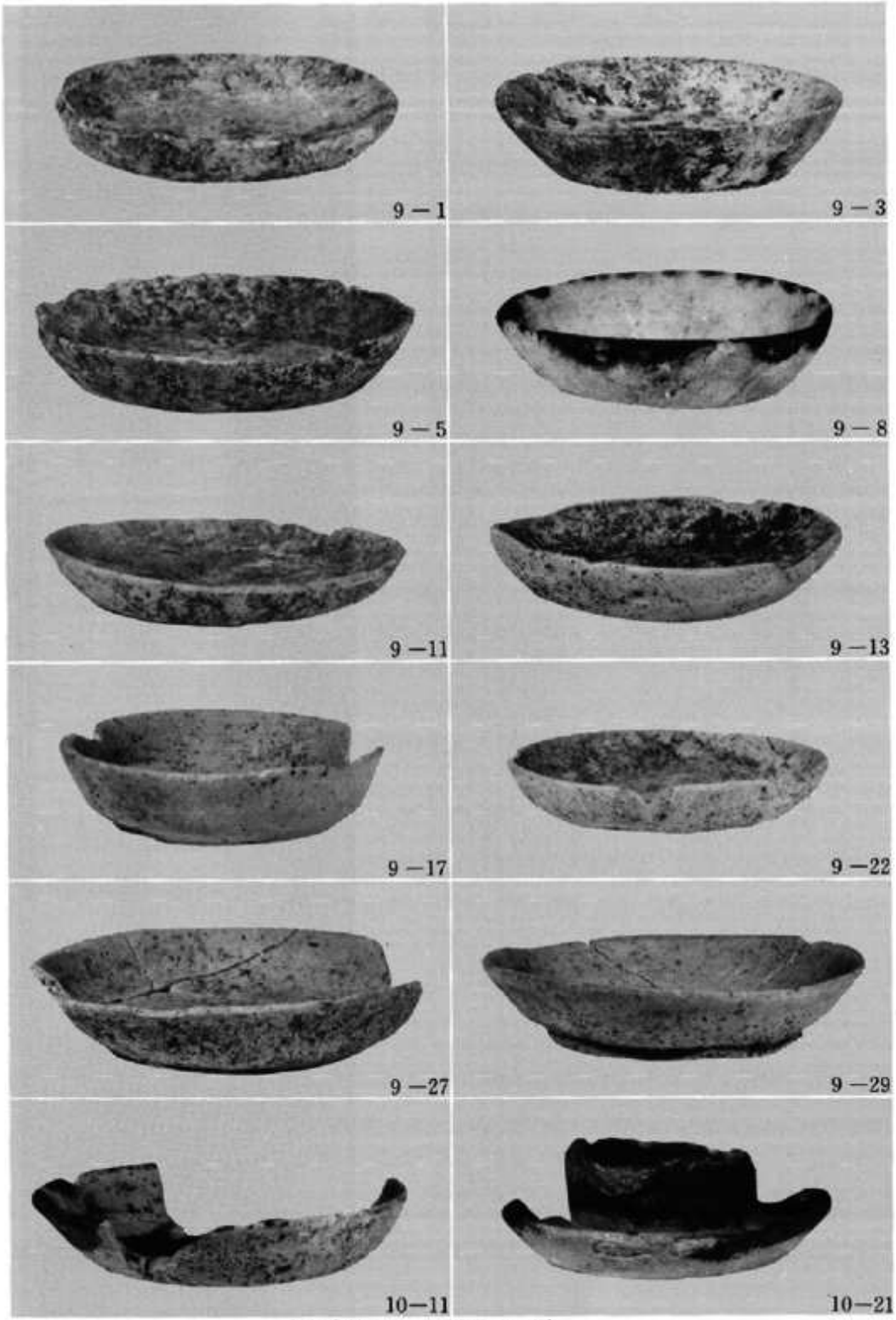


3．井戸2

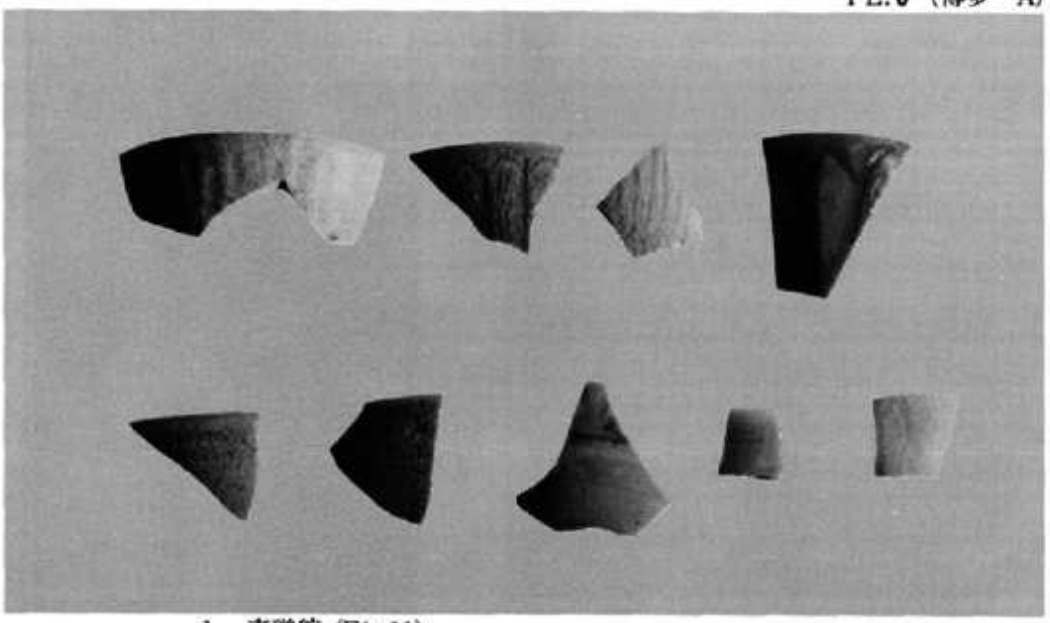


4．D－5掘方壁の鍬あと

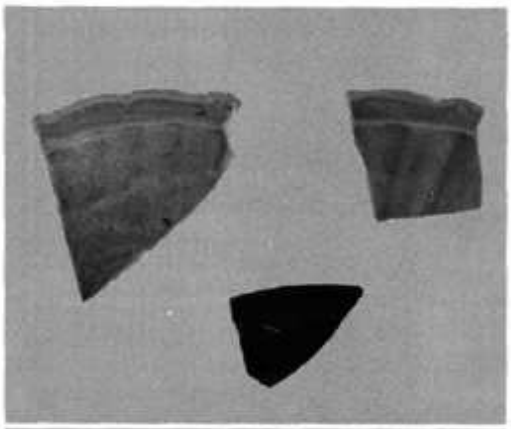
5．南側土層断面

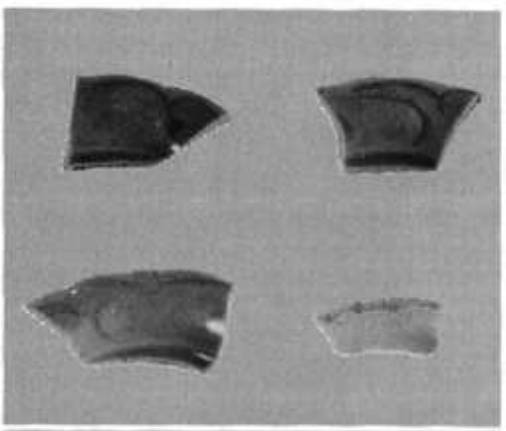


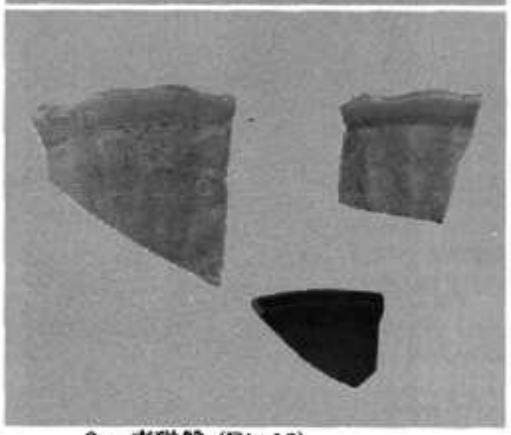
出土遺物（1）　土師器皿・坏



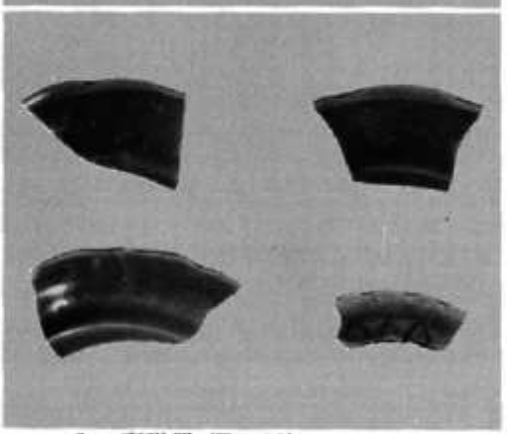
1．青磁碗 (Fig.11)





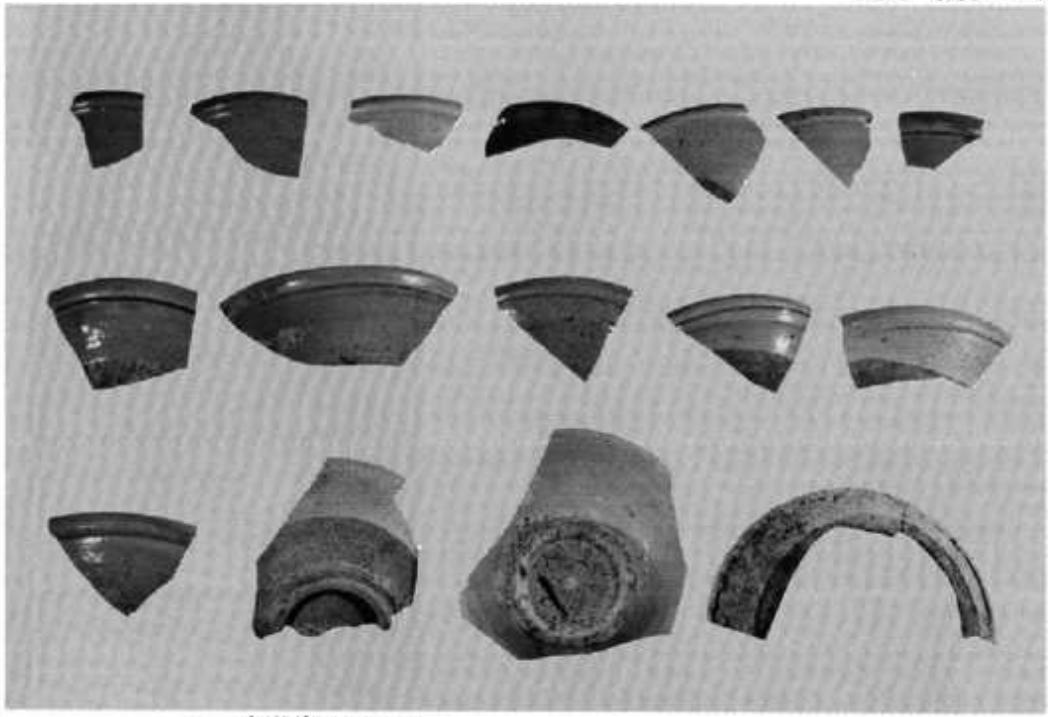


2．青磁盤 (Fig.12)

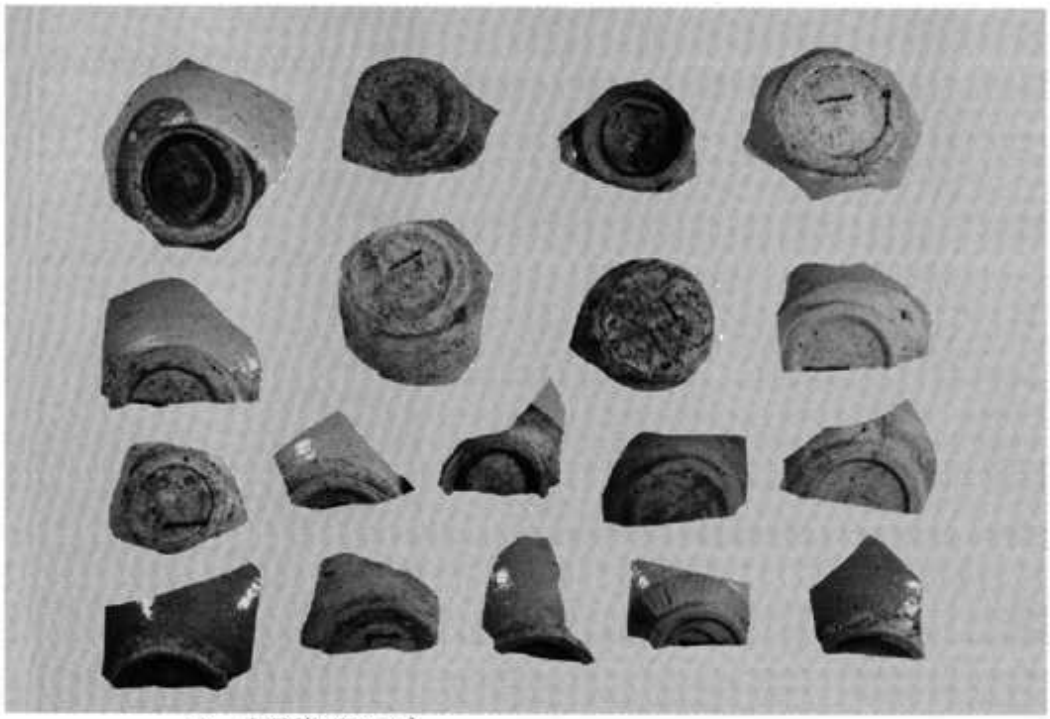


3．青磁皿 (Fig.12)

出土遺物 (2)

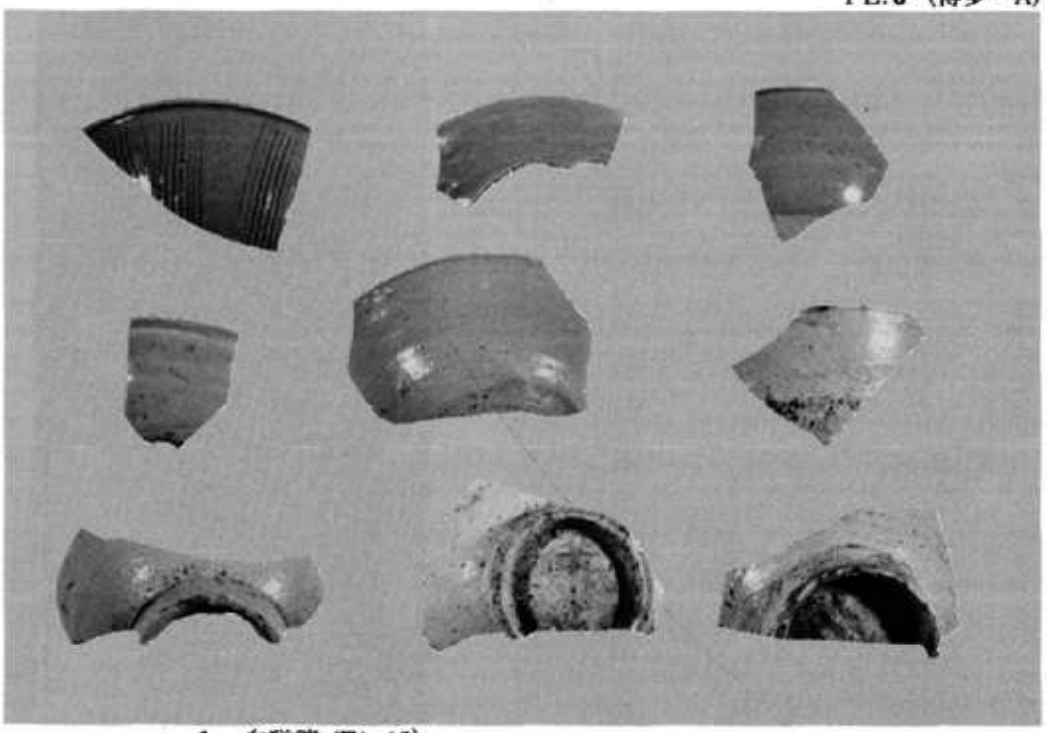


1．白磁碗 (Fig.13)

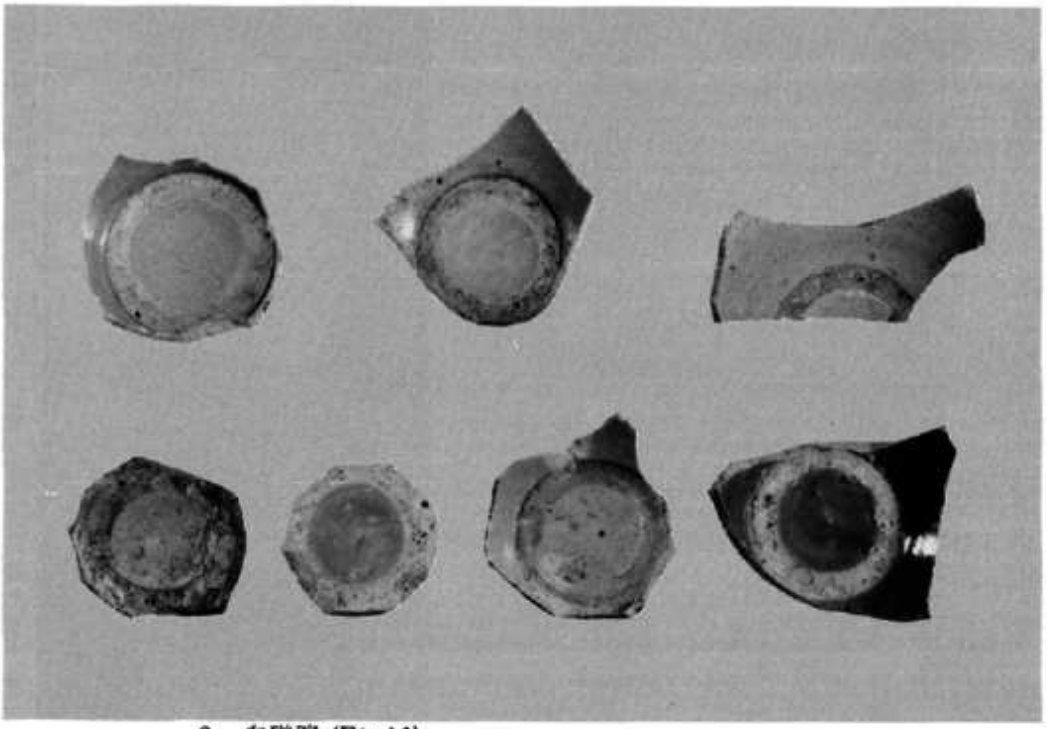


2．白磁碗 (Fig.14)

出土遺物 (3)

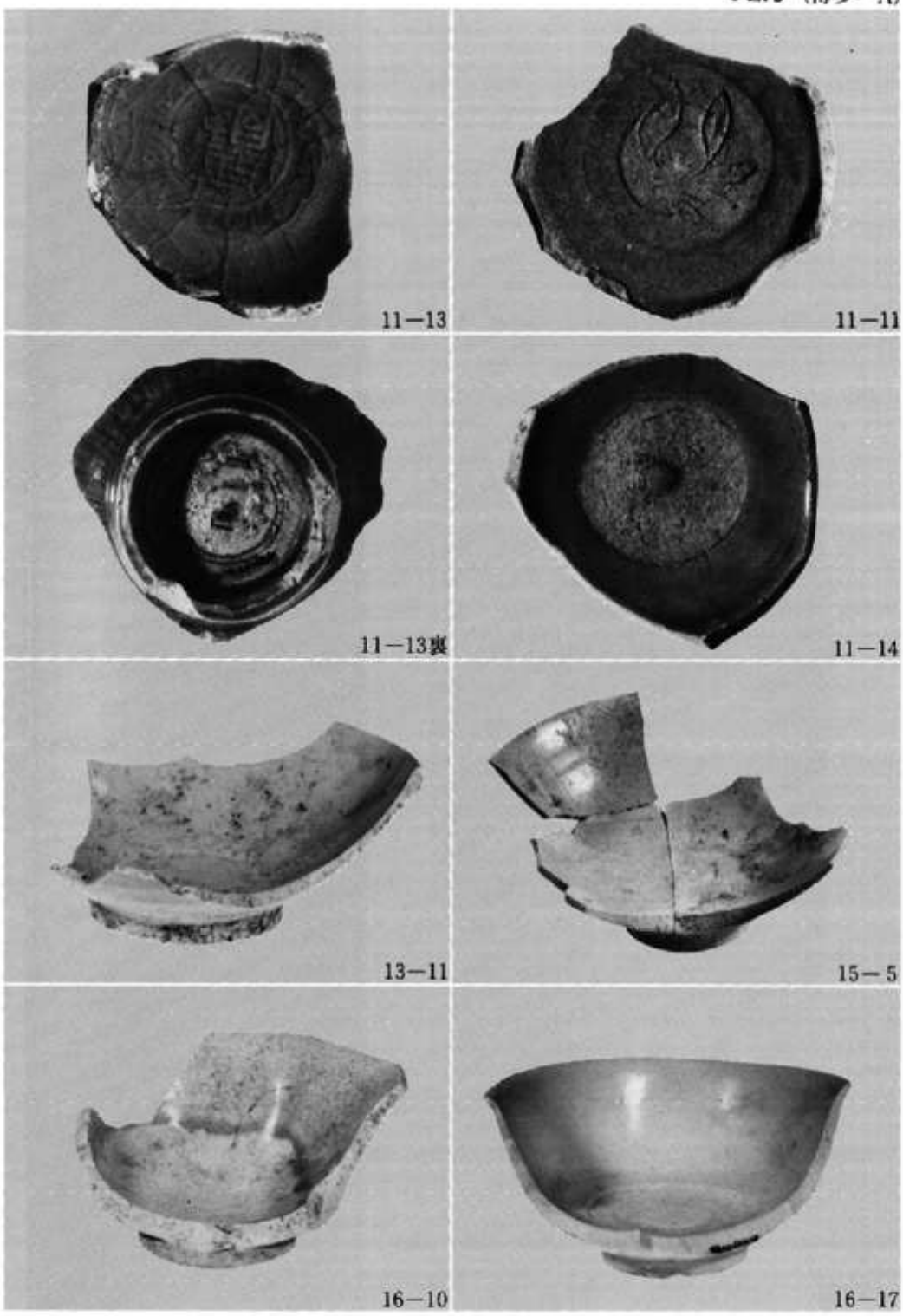


1．白磁碗 (Fig.15)

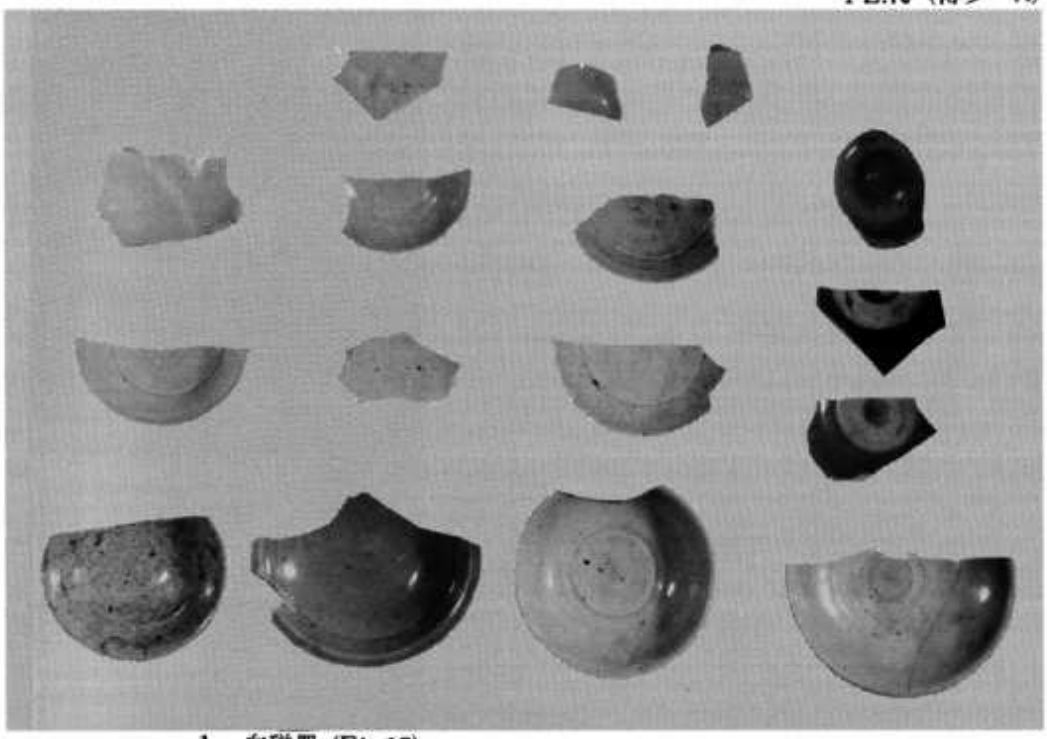


2．白磁碗 (Fig.16)

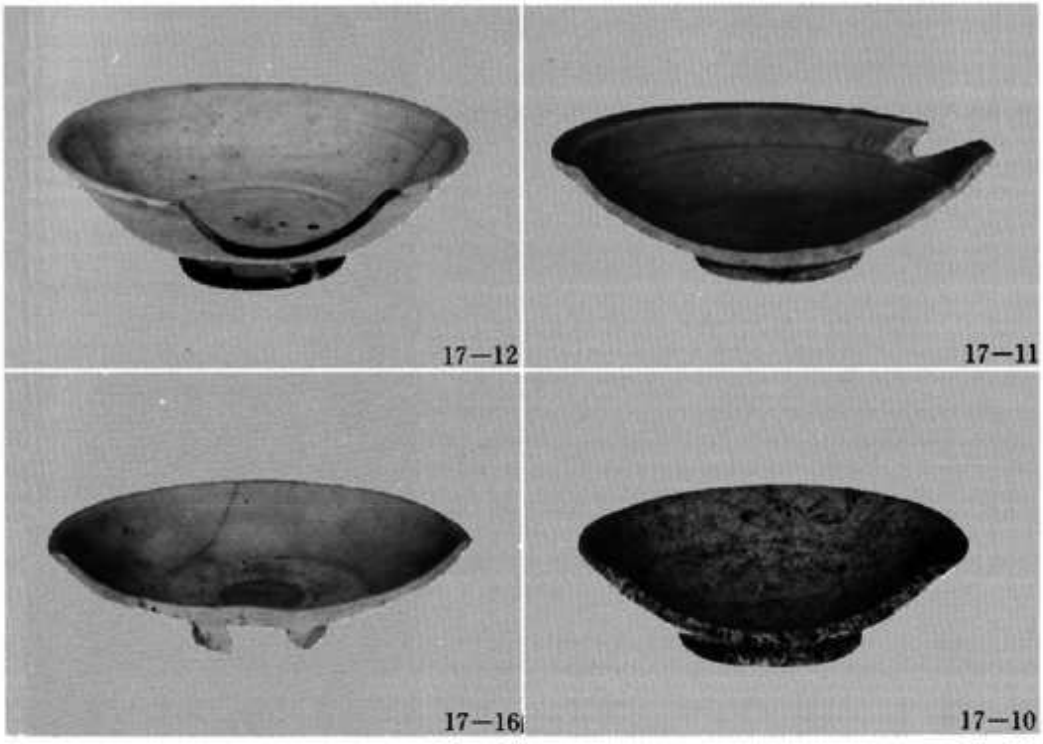
出土遺物 (4)



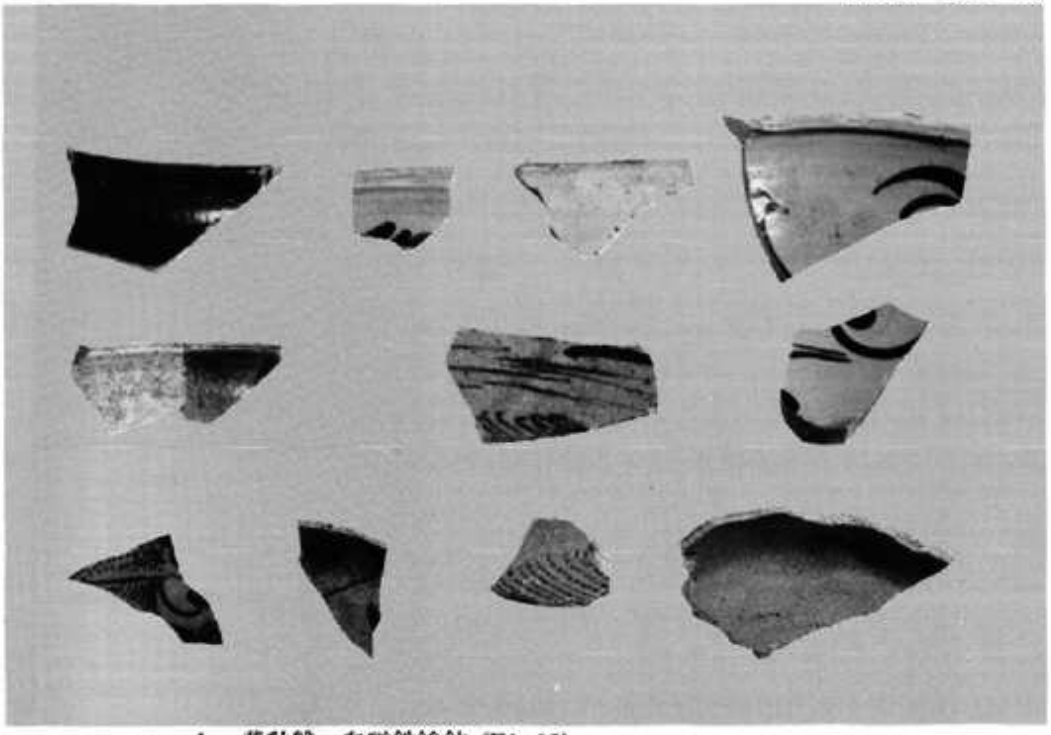
出土遺物 (5)



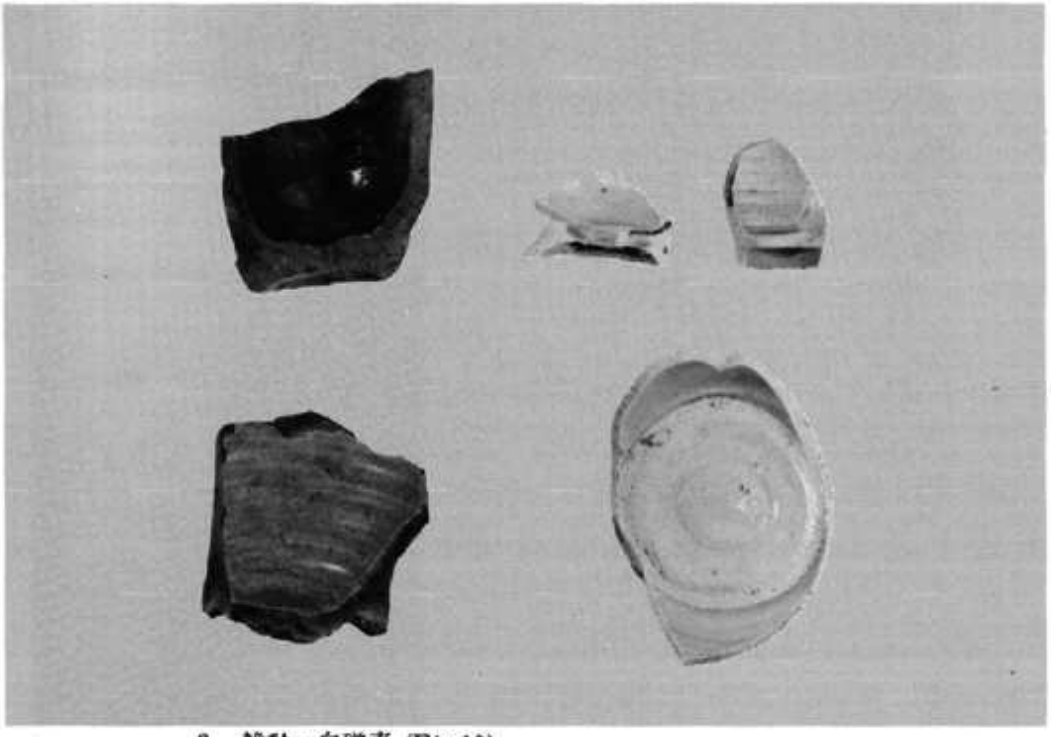
1．白磁皿 (Fig.17)



出土遺物 (6)

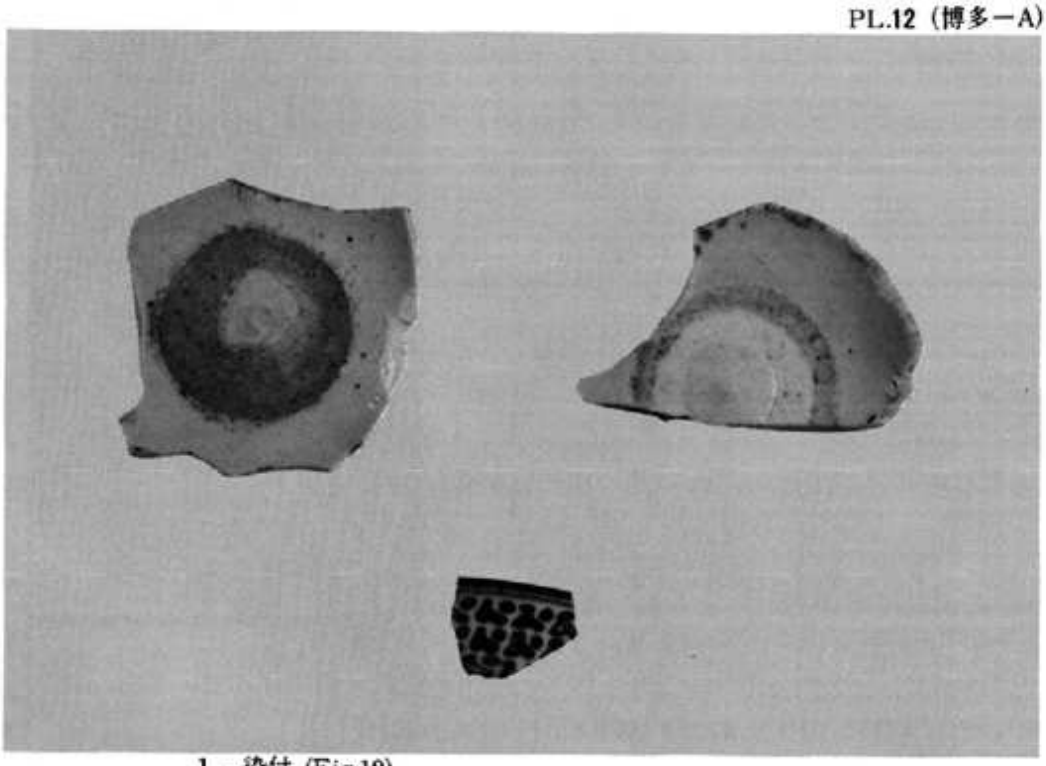


1．黄釉盤・白磁鉄絵鉢（Fig.18）

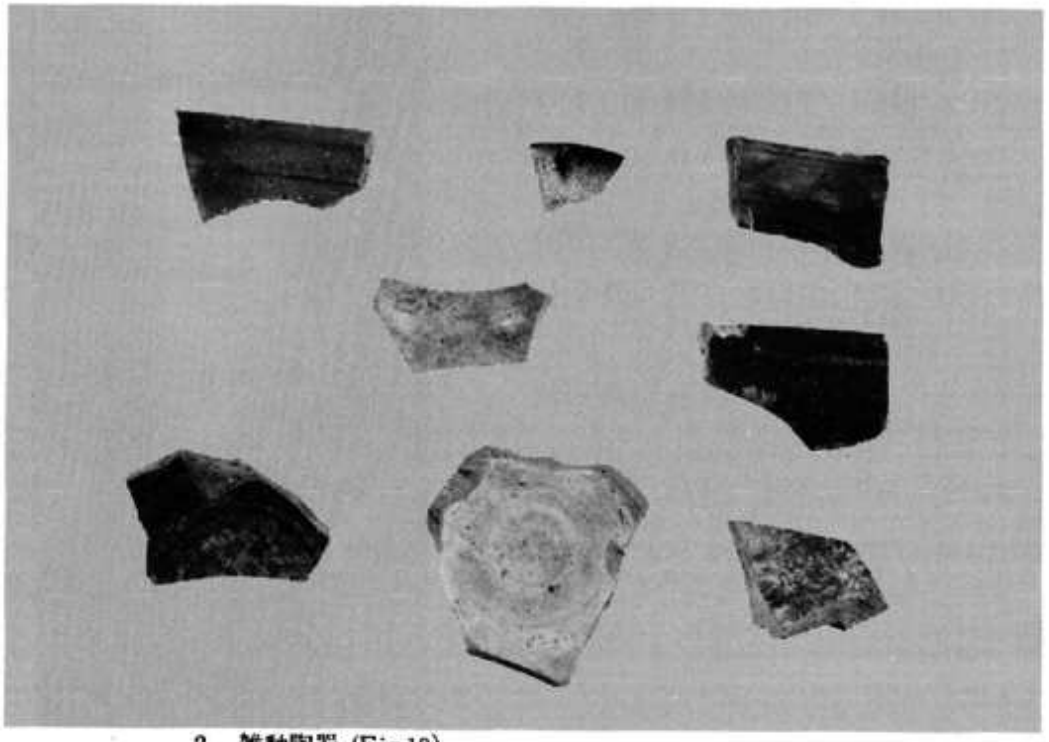


2．雑釉・白磁壺（Fig.19）

出土遺物（7）

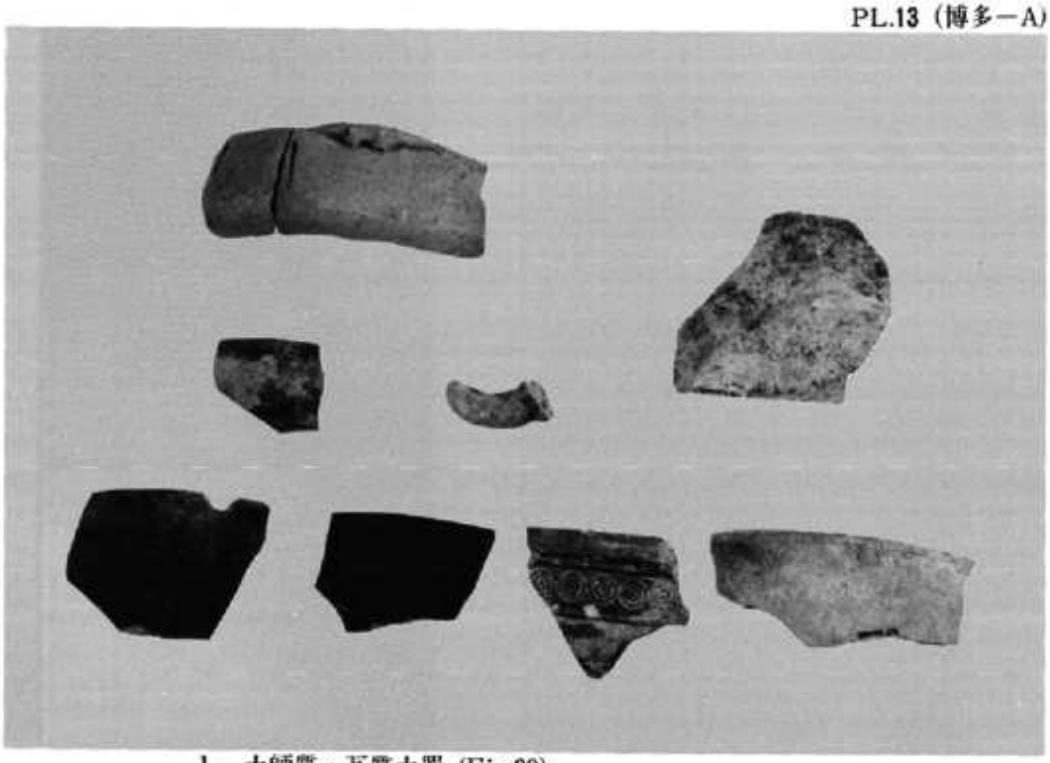


1．染付 (Fig.19)

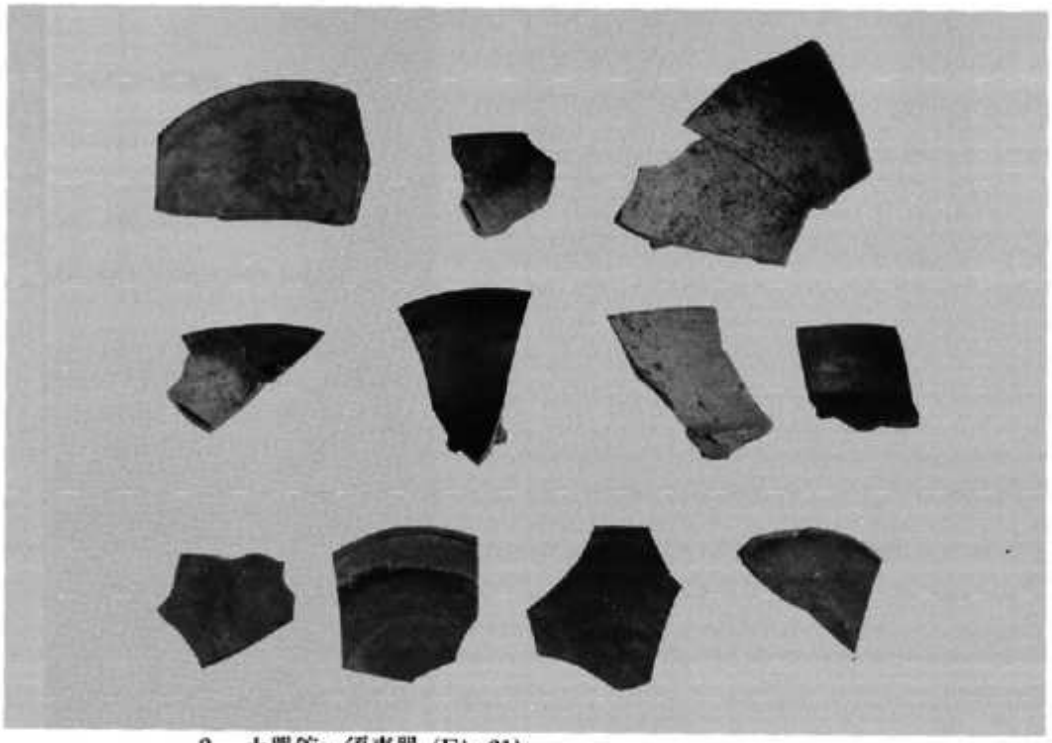


2．雑釉陶器 (Fig.19)

出土遺物 (8)



1．土師質・瓦質土器 (Fig.20)

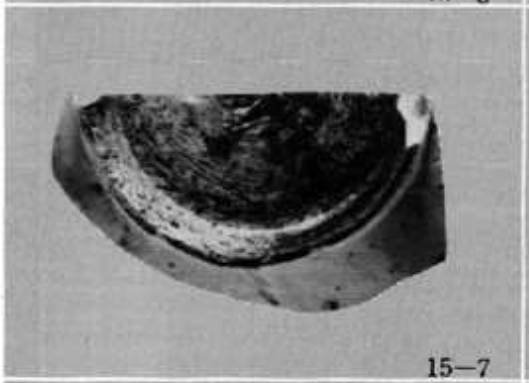


2．土器碗・須恵器 (Fig.21)

出土遺物 (9)

15－8

11－14



15－7

14－17

11－12

17－3

D－6出土滑石製人形

P－3出土馬歯

(1) 博多－B地点遠景（航空写真） ↑　(2) 作業風景 ↓

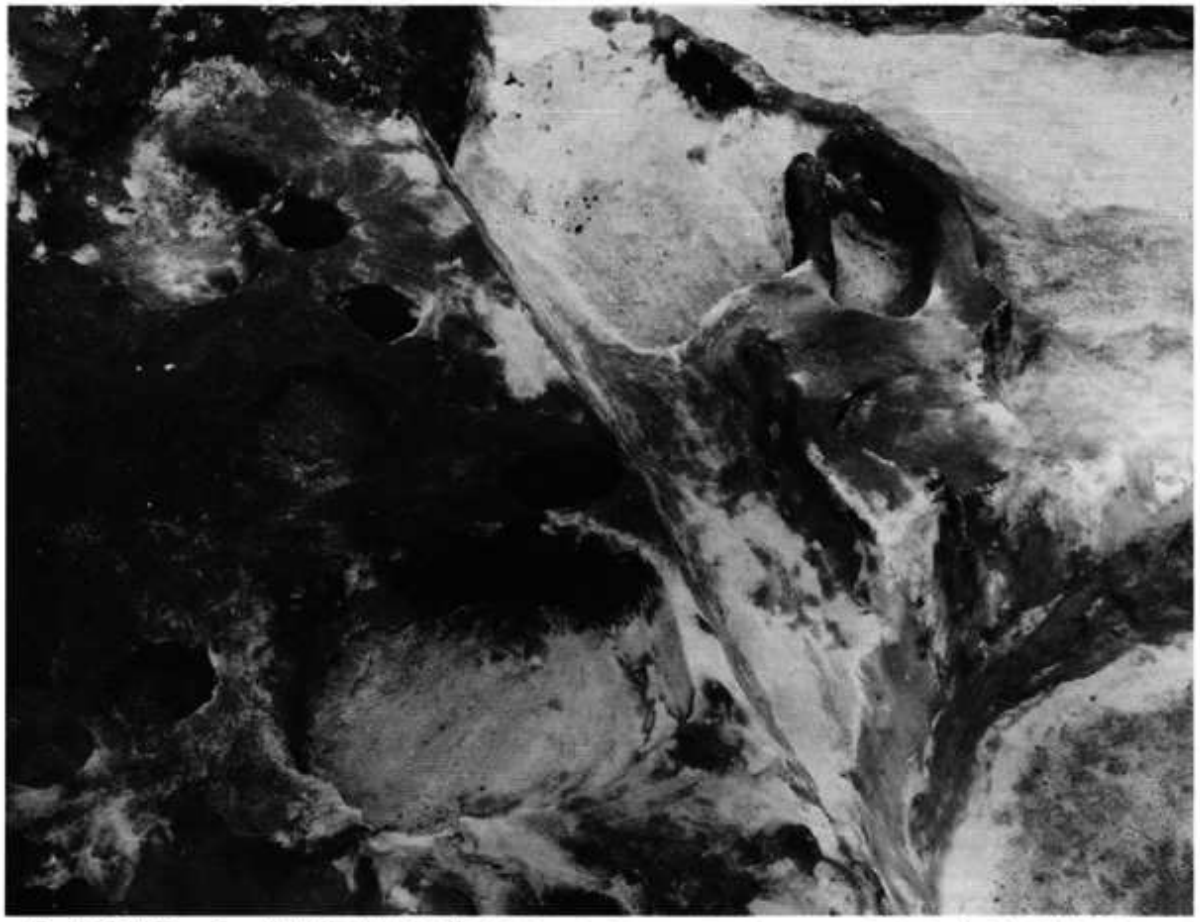
(1) B－3・C－3区遠景（南より）↑　(2) B－3・C－3区遠景（東より）

(1) 冷泉町7－1遠景（東南より）↑　(2) A－2・B－2区遠景（南より）↓

(1) A－1・B－1区遠景（東より）↑　(2) D－1・D－4区遠景（南より）↓

(1) C－2区遠景（東より）　(2) E－2区(地下鉄・換気塔)遠景（西より）↓

PL.19（博多－B)



(1) 1号溝(M－1・方位東西)出土状態（南より）↑ (2) 1号溝(M－1・方位東西)出土状態（南より）

(1) 井戸(D－1)出土状態（東より）↑　(2) 井戸(D－1)枠出土状態（南より）↓

4号溝出土状態（方位・現在の街並平行）

福岡市博多区

博多 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集

1981（昭和56）年3月31日

発行 福岡市教育委員会

印刷 福岡印刷株式会社

博多 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集

1981

福岡市教育委員会